

---

# 俺と雷と幻想郷!?

ふれいむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と雷と幻想郷！？

### 【Nコード】

N6838X

### 【作者名】

ふれいむ

### 【あらすじ】

ただの平凡な中学生一年生、神依崎祠雷<sup>かみいさきしらい</sup>は突然幻想入りしてしまう、外の世界の未練もなく、そのまま幻想郷に住むことにした祠雷は、強くなりたいという思いを持ち、騒がしい暮らしを送っていくこととなる。

## 雷を操る程度の能力（前書き）

文章に読みづらいところが多々あると思いますが温かい目で見てくださいと助かります。

若干のキャラ崩壊、オリキャラありますがそこはスルーの方向でお願いいたします。

## 雷を操る程度有能力

俺の名前は神依崎<sup>かみいさき</sup>祠雷<sup>しらい</sup>、名前のせいで廚二だのなんだの言われるが立派なサッカー好きの健全な人間でアニメとかは興味ない。

サッカー部の一年レギュラーなのが唯一の自慢、中体連では出れたけど負けた、折角のツアーアシストなのに無駄だった。キック力は自慢できるか。

勉強は絵に書いたような理数系＋体育と技術家庭な感じ、人がよりにくいオーラがあるらしい。そのせいでもてないぜ……友達も少ないし家庭の事情も問題あり、正直いやになってくる。

日常はつまらない、それが俺の認識だった。

そして俺は今とても混乱している。原因は今の状況にある。

目が覚めたら見知らぬ天井＋布団で寝ているという経験はあるだろうか。

「ここは何処なんだ？」

確か公園のベンチで寝ていたはずなのだが？

少し状況を整理しよう、俺はコンビニで雑誌を立ち読みした、そして公園のベンチで鳩の群れを眺めているうちに寝てしまったのだろう。温かい夏の日差しは眠気を誘うから困ったもんだ、特に授業中。

じゃあこんなところに誘拐？ いや、そしたら誰か周りについてるだろ、周りの様子を知るのが今は先決だ。

起きあがって探索をしてみる、畳に障子とかなり和風の造りだ、賽銭箱もあるしどうやらここは神社のようだ、500円くらい入れてみようかな、ただでさえわけわかんねえ状況なんだし神様に助けを求めても罰は当たらないはずだ。

外にでるとかなり長い階段がある。境内を一通り見て回ったが誰もいなかった、神主さんか巫女さんの1人くらいいてもいいと思うけどなあ。できればかわいい巫女さんきぼ……なんでもないです。外にでるとかなり長い階段がある。少し降りてみよう、神社には誰もいないみたいだし。長い階段の下には人が住む街が、と俺の中では相場が決まってるんだ。

……とはいっても降りても降りても先が見えない、どんだけ長いんだこの階段は。家の近くには絶対ねえぞこんな神社は……

それよりもだ、今ある理由で足を止めている。それは……

脇の林の中がゴソゴソ言ってるがなん……！？

「なんだよこれ！ 化け物か！？」

なんだか熊みたいな得体のしれないものがある、こんな生き物動物園でも見たことないぞ！というかいたら困る、幼児とか絶対泣き崩れるに決まってる、そう、だってあいつは頭が二つあるんだから！しかもそのほかにもいろいろおかしいところ盛りだくさんだし！

しかも迫ってきてる、完全に狙いは俺だ、やっぱこうゆう化け物には食べられるって感じなのか？そんな人生の終わりがたは御免なんだけどな！

となれば選択試は一つしかない。そう、神社へとにげること。

「なんなんだよこれは！」

必死に階段を駆け登る、いや、降りたほうが良かったかな？行き先がわからないよりは安心できるけど……

息が切れてきた、階段を登り終わったがもう走れない。俺はその場に崩れ落ちた。あの化け物も境内に入ってきてる。

奴は迫ってきてでかい爪のついた腕を振りあげた。もう絶体絶命だ……これで終わりか……

畜生！なんでもいいからあいつを吹っ飛ばせ！もうやけくそだ、どうせなら最後に神風特攻隊やってやらあ。

俺は無謀にもほどがあるが奴に殴りかかった、（チキッて目をつぶっていたがそれは内緒だ）

腕に奴の感触が来た……なんだかものが焦げる音がする、その前に俺は死んでない、いや痛みを感じる前に死んだのか？恐る恐る眼を開けるとそこには黒こげになったやつ死体がある……why？誰がやったんだ？しかもどうやって、まさか俺……のはずはないよな。それよりもなんだか疲れた、すべてを出し切った感じがする、俺は猛烈な眠気に襲われた。意識がブラックアウトしてきた……もうだめだ、おやすみなさい。

目が覚めるとさっきと同じ部屋で同じ状況になっている。夢じゃなかったのか。

「何なんだよもう……」

「あら、目が覚めたの？」

起きたら巫女さんがお粥をもってこっちに来るところでした……待て待て、この人は誰だ？誘拐犯か何かか？

「あの……あなたは誰でしょうか？というよりここは何処なんでしょう？」

「私は博麗霊夢、この博麗神社の巫女やってるわ、あなたは？見たところ外来人みたいだけど」

外来人？なんだそりゃ、いろいろ聞きたいけど名乗るのが先だ」

「俺は神依崎祠雷です、ところであの化け物から助けてくれたのはあなたですか？」

「霊夢でいいわよ、あとかしこまらなくていいわ、話しづらいし、それよりも助けるって何？私は森の中で倒れていたあなたを寝かせた、そして帰ってきたらあなたが妖怪と倒れてた、私はあの妖怪の片づけと祠雷の看病しかしてないけど」

じゃああれはいったい何だったんだ？……つーかあれ妖怪なんだ。

「もう一つ聞くけどお賽銭入れてくれたのって祠雷？」

「そうだけどまずかった？」

……いや目が輝きだした、お粥に卵が乗ったぞおい、態度がガラッと変わったな。

「外の世界のお金は高く売れるし、もしよかったら来るたびに素敵なお賽銭箱に入れていっていいわよ」

「はあ、通貨違うんのか……というかここ何処なんだ？」

「ここは幻想郷、やっぱりあなた外来人だったのね」

「幻想郷？」

「あなたたちの住む世界とは別の世界、パラレルワールドというわけじゃないけど要は別の世界と考えてもらっていいわね」



「……戻れるのか？」

「戻れるわ」

さらりとおれの希望になること言うな。

「じゃあ「ところでさあ」っ、何でしょうか？」

「祠雷は能力持ち？」

能力？なんのことだろう？サイコパワー……なんてな。

「だから、あの妖怪黒こげにした能力よ」

「人の心読むなよ、というか俺は何も知らん（チキって目閉じてたし）」

「私は神社のほうが一瞬光って、何事かと思えば祠雷が倒れてたんだから、間違いなくあれを倒したのは祠雷なわけ」

俺が倒したのか？よくわからんが今のが事実ならそうなることになる。

「面倒だからおんなじ状況作って調べるわ、さあ、外に行くわよ」

今さらりと恐ろしいこと言いませんでしたか！ちょっと……

言われるままに境内に来てしまったが、いったいどうやって調べるんだ……！ 霊夢が空飛んでんだよ！もしかしてここは常識のかけらもない場所なのか？もう早く帰りたくなってきた……

「今から私が弾幕放つから、とりあえず抵抗しなさい」

弾幕？だめだ、もう思考がおいてけぼりくらってる、というか弾幕ってどんな……

「おわ！なんだこれ、これが弾幕なのって人の話聞け！」

「いいから抵抗する、なんかしようとすればいいはずだから」

「はずってなんだはずって！」

あんなもの直撃したら腹に穴開くぞおい！いまはなんとかよけきってるけど霊夢あれ絶対本気じゃないから！

「手っ取り早くいくわよ、霊符「夢想封印」！」

「ちょま、あかんからそれ！」

もうどうでもいい、そうだあの時はやけになって殴りかかったから助かった、でも空飛んでる相手なら殴れない、そしたらやることは一つ！

俺は霊夢に向かって思いっきり両手をかざす、そうすればなんとかなるかもしれない、というかそれしか手段がない！

……今、俺は手から何を出した？まるで雷みたいなビームだったけど。

「やっぱり私の勘は当たったわ、あなたは雷を操れる、「雷を操る程度の能力」といったところかしら？」

手がバチバチ言鳴って電気が通ってる、雷だけじゃない。

「霊夢みたいに言うなら雷だけじゃない、「電気を操る程度の能力」ってとこかな」

程度のはつける意味あるのか？疑問だけどまあいい。

「ねえ祠雷、強くなりたくないかしら」

俺も中学一年生、力だのなんだのには憧れる年ごろだからだろうか、言ってしまったんだこのとき。

「ああ」

「外の世界に戻れなくなるかもしれないけど？」

それは困る……と思いつつも俺がいた環境はそこまでいいものだったか？

- ・ 1つ、両親が絶賛離婚中
- ・ 2つ、外見のせいなのか友達は極端に少ない
- ・ 3つ、今までの暮らしは特別楽しいわけじゃない
- ・ 4つ、つか思い返せば未練0

「今思うと戻る必要すらないかもな」

「帰らなくてもいいっていうこと?」

「ああ、いまさら帰る気も起きなくなってきた」

「決まりね」

こうして俺の幻想郷での暮らしが始まったわけである。

## 雷を操る程度の能力（後書き）

まず1話、読んでくださりありがとうございます。

誤字脱字、その他もろもろあれば指摘してくださいとうれしいです。

学生という立場もありますが更新不定期です、特にテスト前はそうなるでしょうがその点は容赦してくださいさると助かります。

これからもよろしく願います。

**スペルカードを作ろう！**  
**(前書き)**

！  
？  
の後に空白入れてみました、ちょっとは見やすくなったかな？

## スぺルカードを作ろう！

あれから3日ほどたった、博麗神社に住まわせてもらっている俺は家事全般＋雑用という面倒事を押し付けられる羽目になった。まあただ飯よりは確かに気は楽なんだけどさ。

……とはいいつつもこの暮らしにもすぐに慣れてきた、霊夢のスパルタのおかげで生傷の数に比例して能力の使い方も成長しているのは自分でもわかる。まだ弾幕は出せないけどね。

昔から「強くなる」ということには昔からあこがれていた、サッカーだって始めたころは日が暮れるまで練習したものだ。

親戚は父さんに似た、なんて言ってくるがどうなんだろうか？俺の父さんの記憶は剣道柔道空手合気道etc何でも来いの格闘家で、母さんいわく、なんでも国が持つてる武力団体にお呼びがかかってたらしい、そんなこと公にしているのかわからないが、一応戦争しないんだろ？日本は。

離婚して蒸発したのはそれにかかわることらしいけど詳しくは知らない、知る気もない。

ただ俺の性格は父さん似なのは確からしいが。

魔理沙っていう人にもあった、最初はここは魔法使いまでいるのか！なんて思ったがよく考えると、空飛ぶ巫女さんと妖怪がいる時点で何でもありなのは変わらない。

俺も空飛べるようになったら便利だろうな、速く飛べるようになりたいな。

魔理沙も「特訓に付き合ってやるぜ!」とか言って弾幕ごっこ（かなり一方的な）をする羽目になったけど、ここは戦闘狂の集まりなのか？　って霊夢に聞いたら大体あってるとか言ってきたし。ほんとに何なんだよここは。

それはさておきだ、俺の能力についてわかったことがいくつかある。まず、電気のほかにも強力な武器が見つかった、それは「光」だ。閃光手榴弾みたいな使い方ができる便利なもんだ。

それに電気なら携帯の充電から雷落とすまで、ほんとに何でもありらしい、もちろん限度はあるけどな。

「さてと、そろそろ霊夢が返ってくるかな?」

今日の特訓の始まりだ。

あれからさらに1週間がたった、結構忙しい一週間だったと思う。まず俺は人里に初めて行った、確かに俺の格好は目立つみたいで色々ジロジロ見てくる人もいた。イメージは上下黒ジャージにトレシ



ユーはいて江戸時代の町にタイムスリップした感じをイメージしてほしい。霊夢がいなかったらどうなっていたか……

能力の成長は霊夢いわくとんでもない速さらしい。弾幕もある程度出せるようになってきたし能力も上手に使えるようになった。そして霊夢に一発当てることができたのだ、それでも袖かすっただけだったけど。

そして今日はスペルカードたるものに挑戦するらしい。霊夢が返ってくるのが楽しみだ。そろそろ買い物から帰るころだし、今日の特訓が始まる。

「ただいまー」

噂をすればなんとやら、でっかい袋を抱えて霊夢が帰ってきた。

「なあ霊夢、スペルカードって何なんだ？」

気になって聞いてみた、これから習うことだしね。

「とりあえず外に行くわよ、話はそれから」

縁側に座りながら霊夢が説明を始めた。すると霊夢は白紙のカードを10枚ほど渡してきた。

「スペルカードっていうのは簡単に言うと必殺技みたいなもんなの」

「と言いますと？」

「たとえば私の夢想封印もスペルカード、見たことあるでしょ？」

「あれがスペルカードなんだ」

「それよりもまずはスペルカードルールについて知ってもらいましょう」

口調がいつの間にか先生っぽくなってきてるな。

説明が長いので俺が要約しよう。スペルカードルールとは要するに戦いのルールみたいなもので。みんなはそれを「弾幕ごっこ」と呼ぶらしい。

・まず勝ち負けの決め方、それはどちらかが被弾するかスペルカードを全部攻略されてしまうとそこで勝負がつくらしい。

・基本的に絶対によけられないようなものは反則で、それは普通の弾幕にもスペルカードにも当てはまる。

とりあえずこれだけ知っておけば大丈夫らしい。細かいことは後回しらしいが。

そして1枚のスペルカードにも弾幕ごっここのときの弾幕を出す使い方とそれ以外の能力を活用した使い方、たとえばおれだったら電気を使って高圧電流をばらまいたり、光を使ってフラッシュ！なんて感じらしい。

とにかく今日、俺のスペルカードを作るらしい、今はどういうものを作ったらいいか会議中だ。

と、そこへお客の登場だ。

「おーっす霊夢、遊びに来てやったぜ」

魔理沙が遊びに来たのだ。

「今忙しいの、手伝ってくれるんなら大歓迎だけどそうじゃないんなら適当にお茶でも飲んでて」

「忙しいって、二人して何してるんだ？」

俺は魔理沙に事情を説明する。

「なーんだ、そういうことならあたしも手伝ってやるぜ」

「いいけどパクるんじゃないわよ」

「失礼な、魔理沙様がそんなことするはずねーじゃないか」

「はいはい」

パクるって何だ？つーか前科ありみたいな話し方だったけど。

俺の弾幕は直線的だが、スピードもあって角々と曲がる、本当に雷のようだ。それをうまく使おうというわけだが、それだけじゃ物足りないのだからちゃんとほかのバリエーションのものも作るらしい。おれには光も扱えるので好都合なんだそうだ。

こうして3人で俺のスペルカードを作ることになった……………

そうして俺達は4枚のスペルカードを作った、魔理沙も帰ったしもう辺りは暗くなっていていたので夕食とすることになった。本格的な練習は明日から、明日が待ち遠しいな。

そして俺の光の能力は暗い所を照らせるために重宝されている、電灯も何もないため基本蠟燭とかだったらしい、金銭的に助かるらしい、そこまで家計は火の車だったのか……確かに参拝客見たことないけど。

まあ家計の事情を俺が気にする必要もない、俺まで養ってるんだから問題ないだろ。

さあ、明日が楽しみだ。

## スペルカードを作ろう！ (後書き)

スペルカードの方は次回にさせていただきます、しばしのご辛抱を。

魔理沙との出会いを省略しました、ファンの皆様ごめんなさい！  
うまく書ける自信がないんです、いやほんとに。

誤字脱字、その他もろもありましたら指摘してくださいと助かります、どうか次回も見てくださると嬉しいです。ではこの辺で。

## スペルカードを作ろう！その2（前書き）

今回は結構展開飛ばしてましたね、正直やりすぎた感があります…  
…いや、ちゃんと反省してますよ。

今回はスペルカード一挙公開です。

## スペルカードを作ろう！その2

朝起きたら霊夢は出かけていた、机には『魔理沙のところに行ってるから待ってて』という置手紙、まさかギャラリーに入るのか？緊張してくる、霊夢も初めてスペルカード作った時はこんな感じだったのかな？ たぶん違う気がしてきたけど。

スペルカードの名前ってやっぱり厨二っぽくした方がいいのかな？若干それ要素入ってるけど。個性が出ると思うんだよね、いや、俺個人の感想なんだけども。

テーブルになんかメモがある、内容は……「魔理沙のここに行ってくる」

「ps、言い忘れたけど、今日は本気出すから覚悟してね」

……おいおいちょっと待て、本気出すって言ったって今まで手抜きだったってことだろ。本気なんな出されたら俺しんじやうぜ？

いや、こんなこと言ってる暇があったらさっさと霊夢に対抗する方法でも考えなきゃな。

お賽銭入れとこ。

「ヤッホー祠雷、晴れ姿を見に来てやったぜ」

魔理沙だ、晴れ姿も何もぼろぼろになって雑巾もどきになった姿しか見れないと思うが。

「ん、ちょっと待て、霊夢はどうした霊夢は」

「置いてきたぜ」

「いや置いてきたじゃなくて」

「ちょっとばかり飛ばしたんだぜ」

「魔理沙ってそんな早いのか？」

「幻想郷の中でも天狗の次に早いぜ」

「そうなのかー」 「キャラが被るからやめてほしいのだー」

「今何か聞こえた？」

「いや、それよりいいもんやるよ」

そう言って魔理沙はスペルカードを取り出した。

「マスタースパークをちょっくら改造したんだぜ、祇雷にぴったり



のカードなんだぜ」

「もらっていいのか？」

「そのために昨日徹夜したんだし、特別にタダなんだぜ」

「普通なら金とんのかよ、まあとりあえずどんなもんなんだ？」

「使ったらわかるんだぜ」

なんか不安だな、おい、使ったら花火が出るとかいう落ちはごめんだけど。

「そんなことはないんだぜ、信用していい物だぜ」

何でこの連中は声に出さないことが聞こえてんだよ！

「秘密だぜ」

「だゝ、もういい……！ 霊夢が来たぞ」

霊夢が飛んできた。

「二人して何してんのよもう、魔理沙も本棚倒すなんて古いやり方してまで来たんだからなんか二人してたくらんでんのはわかってんのよ」

本棚倒した？まさか下敷きにしたのか……魔理沙も鬼だったな、これ。

「それはいいとして、祠雷と今日は本気の勝負よ、たぶん怪我しないと思うけど」「いや絶対無事じゃ済まないからね!」 気をつけるように」スルーかよ!

「さあ準備はいい?」

そう言って霊夢は高く飛び上がり、スペルカードを構える。

「畜生、もう何でも来い!」

俺もやけくそになってスペルカードを構える。

先に手を出したのは霊夢だった、俺だって伊達にスパルタ受けてない、このくらいなら……

「本気で行くわよ、覚悟はいい?」

……! 一気に弾幕が早く、厚く、複雑になる。けど大丈夫、俺には見える、この一週間チョイで練習したんだから。

こっちからも反撃だ、いけ! 俺の雷弾幕。

霊夢は軽くよけながらいった。

「様になって来たんじゃない、でもね、まだまだ甘いわよ」

そう言って霊夢のスペルカード発動。

『霊符「夢想封印」』

なんちゅう弾幕だよまったく、こんなの避けれなんて鬼畜にもほどがある。

さて俺も行きますか、スペルカード。目には目を歯には歯をだ。

『雷光「稲妻柱の大封絶」』

霊夢を取り囲むように弾幕の雷が落ちる、そこから跳ね返るように霊夢に向かっていく弾幕……畜生、造作もなく避けられた。

どっちもスペルブレイクだ。

「次は俺からだ！」

『光撃「スタンフラッシュ」』

「ッ！」

閃光がほとばしる、目がくらんだ霊夢に祠雷が全方位にばらまいた弾幕が襲いかかる。

霊夢は作るのには協力したが中身は知らない、完全に意表を突かれた。

「もういっちょ、『雷符「雷様の大名行列」」！」

意外と行ける、そう祠雷は思った。尤も勝つのは望み薄なのも理解していた。魔理沙のスペルカードを気にかけてはいたがイレギュラーで得を得るのはもともと勝ち目の薄いこちらであるのは確かだが。

周りに弾幕を降り注ぎながら直進する幾つもの大きな弾幕。上とい  
う上のあらゆる方向からくる弾幕は大きな脅威であった。

「これは手ごわいわね、『夢符「封魔陣」』！」

弾幕が消える。そのすきに霊夢の弾幕が来る。

こっちに向かって曲がって来る、これはよけるのつらいな、けど俺  
だって腹に穴開くのは御免なんだ！

「当たればいいが……『電撃「ボルトナックル」』」

正直無謀なスペルカードだ、自分が直接近距離まで寄って弾幕をほ  
ぼゼロ距離で叩きつける。

弾幕消しの効果をつけてみたが（魔理沙の入れ知恵だけど）どうだ  
ろう。素直に通るかな？

俺は飛び上がる、少しなら俺だって飛べるんだ、すぐ落ちるけど。

「この状況で突進ねえ……やられるつもり？」

あっさりよけられる。けど本命はこっちじゃない！

「馬鹿言うな！ 喰らえよくわかんないやつ！」

「言い方がひどいぜ、せっかくのプレゼントなのによくわかんない  
やつ扱いされたぜ」

今自分でも驚いてる、使っておいて何が起きてるのか分からない。  
いや、全力で使ったから疲れてきた。それどころじゃない。体の力

が抜ける、あの妖怪と戦った時と同じだ。うう、意識の混濁に逆らえない……もうお休みだ……

「まったく、あんなに強力なの作ってやったのに全力出すからこうなるんだぜ」

空中で祠雷を受け止めた魔理沙はため息をつく。

「もう少し信用してほしいんだぜ」

「あれ作ったのあんたなのね、まったく、どういうつもりなの？」

「ちょっと祠雷に肩入れしただけだぜ」

「私も疲れたし、休みましようか」

お茶を用意し始めた霊夢、ふと気になることが頭に浮かぶ。

「そういえば、あのスペルカードの名前はなに？」

「決めてないんだぜ」

「無責任なんだから……」

こうして俺の地獄は終わった……



## スペルカードを作ろう! その2 (後書き)

今回も読んでくださってありがとうございます。

ああ、文章力がほしい……読みずらかったらいつてください。これから生かしたいと思います。

## スペルカードを作ろう！その後（前書き）

紅魔館フラグ立ててみました、テスト前なのにこんなことしていいんだろうか？



## スperlカードを作ろう！その後

「僕、将来お父さんみたいに強くてカッコいい人になる！」

これは……俺の夢か？　また懐かしい夢だ。あの頃は俺も純粹だった。ただ憧れしかもっていなかった。

「そうか、なら父さんと一緒に特訓だな」

覚えてる、あの笑顔、思えばあの頃からだった、強くなって、誰よりも上に立って、父さんみたいになるって思い始めたのは。なんだかんだいって好きだったんだな。ひねくれてんのは俺のほうか。

今の俺が父さんに似てるってのは確かにあってるのかもな……

「いつか父さんより強くてカッコいい人になれよ」

いつから嫌いになったんだろう、いなくなってから？　そうかもしれない、誰だって勝手にどっかに消えてった、自分の都合で放り出したやつを好きでいられるか？　俺は無理だ。

何自問自答してんだろ？　今はあいつより強くなって見返してやろうとしか思えない。

だから頑張れてんのかな？　この天の邪鬼は……

……頭が割れるように痛い、ここは博麗神社か、たしかスペルカード使って、力使い切って。

「あら、案外早く目覚めたわね」

「霊力使いきつといて、立ち直りの早いやつだぜ」

「俺はどんくらい寝てたんんだ？」

「3時間くらいかしらね」

以外に気絶してたんだな。つーかどんぐらいが普通かわからんけど。というか解りたくもないけど。

「それはそうと、祠雷に決めてほしいことがあるぜ」

「決めてほしいこと？」

「あのスペルカードの名前だぜ」

確かに名前決めないとかつこ悪いしな。

「それにスペルカード使うときは使うスペルカードの名前を宣言するんだぜ、それがルールなんだぜ」

「つまり決めとかなないと使えないわけか」

「そういうこと、魔理沙があんたに押し付けただけなんだけど」

「まあ、とりあえず名前だが……なんか参考にできないかな？」

「マスタースパークを改造したんだぜ」

一回だけ見たことあるな、初めて会った日に。  
あれを改造して……

「その前にどんなもんなのか俺もよくわかんない」

自分も理解できなかったわけですよ。何が何だか。

「マスタースパークの規模を小さくしてとりあえずそこらじゅうに  
所かまわず撃つんだぜ、あと若干軌道修正したり、曲がったり移動  
したりするから、結構よけずらい用になってるぜ」

やっぱり改造したんなら本家の名前を入れるのが筋だよな。

「やっぱりマスターかスパークのどっちか使うのが礼儀か」

「とりあえず魔理沙さんには秘密兵器があるんだぜ」

そう言って魔理沙が取り出したものは……外の世界のゲームの攻略  
本、見たことないようなマイナーなゲームだなおい。

つーかなんで持ってるんだろう？

「何それ？どっから盗んできたの？」

「盗むとは失礼な、パチュリーから死ぬまで借りるだけだぜ」

それ盗むのと同じだよな、つーかパチュリーって誰だ？  
まあそのうちわかるとかしか言われないんだし、別にいつか。

「とりあえずその攻略本から名前をパクると」

「何かかっこいい名前がたくさんあるぜ、ほら」

そう言われて中を覗く、手始めに魔法一覧でも……おつ雷属性一覧か、期待できるかも。

「サンダー」敵一体に雷を落とす

「ライトニングボルト」激しい雷が敵一体にダメージ

「スパーク」敵一体に雷属性のダメージ

……手抜き臭すぎる。もうチョイましな名前はないのか。とはいつつも俺だってサンダーサンダラサンダガしか言えねえけど。

「シャイニングスパーク」周りの敵に放散するような雷攻撃

何かぴったりなのがある！

「これなんかどうだ、効果までぴったりだ」

「よくわかんないけどかっこいいからいいぜ」

そうか、こっちにはゲームがないのか。

「あら、以外に普通のが出てきたわね」

「いや、何かわからんけど強そうだぜ」

「『雷符「シャイニングスパーク」』　なんてどうだ？」

「いいと思うぜ」

「まあ、かぶってるのはこの際どうでもいいのかしら」

「気にしたら負けだぜ、霊夢」

かぶってる？ 誰とだ？ まあそれよりも今は重要なことがある。

「なあ霊夢、腹減ったんだけどなんか作るもんなるか？」

「それならお昼ごはん残ってるから適当に食べなさい」

「センキュー……野菜しか残ってねえ、まあいいか」

紅魔館では。

「咲夜、なかなか面白い外来人がいるみたいね」

「面白い外来人といいますと、この前魔理沙が言っていた博麗神社に住んでいるという人でしょうか？ 名前は確か……」

「神依崎祠雷、なかなか見込みがあるわ、今すぐにも見に行きたいんだけど」

「すぐに用意をいたします」

そう言って咲夜はどこかに消えた、レミリアは。

「少し手合わせしてみたいものね」

そう言って紅茶を飲みほした。

「で、あんたはいつまで居座る気？」

「もちろん、気が済むまでだぜ」

「あきれるわね」

「あら、こんな時間にお客さんだわ」

「こんな時間って……まだ昼間だぞ」

「だからよ」

だからよって、どういふことだよ。

「まあ、直ぐにわかるぜ」

どうも納得できない。ここでは常識のかけらもないのは知ってるがどうもなじめん。

「遊びに來たわ、靈夢」

そう言つて入つてきたのは……幼女？

「どーせこいつが目当てなんでしょ」

「あら、鋭いわね。まあ当たり、だつて面白そうじゃない」

見た目と反するしゃべり方だな、まあ人じゃないんだろう。

「お嬢様」

「わかつてるわよ、私はレミリア・スカーレット、あなたも予想がついてると思うけど人間じゃないわ」

「祠雷、こいつは吸血鬼よ」

吸血鬼……ここはほんとに何でもありだな。

「あの……そちらの方は？」

なぜメイド服なんだろう？ お嬢様とか言つてたしでっかい屋敷に

でも住んでるんだろうか？

「私は十六夜咲夜と申します、紅魔館のメイド長です」

紅魔館？　それがこの人たちの住んでる所か。

「ずいぶんと丁寧ね」

「あら、初対面の人には丁寧に話すものよ」

「あんたが言えることか。で？　何の用で来たの」

「なかなか面白そうな外来人じゃない、能力もちだって？」

「まあそうね」

「なかなか見込みはあるぜ」

「何の能力かしら？」

「あっはい、「電気を操る程度の能力」です」

びっくりした、いきなり話を振られたな。

「電気ねえ、香霖堂につれてったら喜ばれそうじゃない」

「それは考えてるわ」

「あいつんとこの機械動かしてやったらどんな顔するか楽しみだぜ」



何か蚊帳の外なんだけど……どうしよう。

「咲夜」

「はい」

！ 咲夜って人も能力もちなのか、瞬間移動としか思えない、一瞬で出てきたな、今。

しかも紅茶……やっぱりメイドらしいことしてんのかな。

「そう言えば祠雷に何の用なの」

「ただ顔を見に來ただけよ、あとはどのくらい強いのか聞きに來たってところかしら」

「あんたのこの門番ならいい勝負になるかもね」

「そう、わかったわ。今日はもう帰りましょう、咲夜」

そう言ってレミリアは出て行った、思ったんだけど日傘だけで日の光が平気になるなんてチートだよなあ。持ってるのは本人じゃないけど。

「そのうち紅魔館に來てね、いつでも招待するから」

これは俺に向けたメッセージか。吸血鬼の住む館ねえ、どんななんなんだろう。

「おっ、咲夜のやつが珍しい、ティーカップ忘れてってるぜ」

「明日にでも届けばいいでしょ、今から行くのだからいいしついでに祠雷も連れてけばいいじゃない」

また俺だけ蚊帳の外のまま話が決められた……早速行くことになりそうだなこれは。

## スペルカードを作ろう！その後（後書き）

次回から紅魔館編です、変なところあったら指摘お願いします。

ちなみに本編に出てきた攻略本は適当に作ったものです、ソースはありませんww

## 紅魔館へ行こう（前書き）

結構読みづらいかも。まあよろしくお願いします。

## 紅魔館へ行こう

俺は今、とてつもない恐怖体験をしている。それは……

「魔理沙！ もうちょイ、もうちょイ速度落とせ！」

「こんなんでビビってちゃ幻想卿最速になれないぜ」

「なる気ないから！ほんとに頼むって！」

「箒に乗った時点であきらめるんだな」

俺は今魔理沙の箒に乗っかっているわけだが、どうしてこうなったのかというと――

話は20分前。

「さて、そろそろ行きましようか」

そう言って霊夢は飛び立つが。

「ストップ！俺まだ飛べないから。そりゃあ20mくらいは飛べ

るけどさ」

「ああ～もう、面倒くさいわね。仕方ないから歩いて行くわよ」

「お～い霊夢」

あれ？ 何で魔理沙がここに？

「何であんたが来るのよ」

「こんな面白そうなことほっといたら一生後悔しそうだぜ」

「あんたらしいわね、いいけどこれから歩きよ」

「――は？」

「いや、俺が飛べないから」

「なるほど、ならば話は早い、箒に乗せてやるぜ」

箒ねえ、いや、乗ってみたくないわけじゃないけど。

「いいのか？」

「別にいいぜ」

「それならお願いしようかな」

「よし、だったらとっとに乗った乗った」

——乗ったのはいいけど仮にも女の子の肩につかまって、とかはどうもなあ。同性と手をつなぐこともめったにないのに。話すことだって。

「覚悟決めなさいよ」

ん？ 今の霊夢の言葉は一体どういう意味n

「落っこちなよ」

そして今に至る。

「おっ、見えてきたぜ」

「だったら落とせ！」

「いけねえいけねえ、今日は図書館じゃねえんだ」

地獄が……終わった。

「祠雷、生きてる、意識ある？」

「なんとか」

「そう、よかった」

改めて周りを見渡してみる、あるのは門だけでも。  
つーかあそこで寝てる人誰？

「美鈴ったらまた寝てるのね」

そう言っつて霊夢は美鈴さん？ の額を突っついた。

「……ふああい、！ いや、今のはですね寝てたんじゃないんです  
その」

「あんたは何言っつてんの？ 正氣に戻んなさい」

「あつ、何だ、咲夜さんじゃなかったんですか、いやゝびっくりさ  
せないで下さいよ」

「だったら居眠りやめなさい」

「厳しい……あれ？ そちらの方は？」

「あ、神依崎祠雷です」

「私のとこの居候」

「じゃああの噂の外人さんですか」

噂って、もしかして俺のこと結構広まったりするのかな。

「あつ、一応外来人です。ところであなたは……美鈴さんでいいんですか？」



「あっ私は紅魔館の外回りを担当してます、紅美鈴と申します」

何か中国人みたいな名前だな。

「何か失礼なこと考えてませんか？」

「いえ、別に。ところで噂ってどんな風なうわさで……」

「ああ、博麗神社になかなか強い外来人がいるって、人里でも広まっていますよ」

根も葉もないうわさが広まってるな、おい。俺のこと見たらがつかりするぜ、きっと。

「で、噂の話はいいからとっとと入れてほしいんだけど」

「そう言えば今日はどうしてここに？」

「咲夜が忘れ物してったのよ、届けに来たわ」

「はゝそれは珍しい、咲夜さんもそんなことあるんですね」

そう言って美鈴は門を開けた、よくよく見てみると紅魔館ってすんげえ立派な建物なんだな、外の世界じゃめったに見れねえぞ、これ。

「行くわよ、早くしないと片づけちゃうじゃない。」

「何を？」

「何のためにお昼時に来たと思ってんのよ」

「たかるのか」

「何か悪いの？」

いやな予感がしてきた……

「いや、別に文句とかはないけど」

そして俺は美鈴さんに聞いてみる。

「あの、美鈴さん。もしかして霊夢って結構昼飯たかりに来てるんですか？」

「さんなんかつけなくていいですよ、まあそうですねえ、特に冬場は多いかもしれません」

常習犯か。つーかそれでいいんだろうか、もしや本命はそっちとか。

「あっ霊夢に置いてかれる、それではまた」

「大変ですねー祠雷さんでしたっけ」

そして玄関の前で俺は気づいた。魔理沙がない。いつの間にとっか行ったのか。

「霊夢、魔理沙は何処行った？」

「どうせ図書館に本盗みに行ったんでしょ」

盗みって……あいつは何やってんだか、まあ何となく本性わかってきた気がする。

どうせ死ぬまで借りるだけとか言ってるんだろう。

「おい霊夢、勝手に入っているのか？」

「別にいいのよ、いつつもそうなんだし。咲夜ーいるんでしょー」

「あら霊夢じゃない、今日は何の用？」

うーん、どうもこの突然現れるのには慣れない。

「ほら、あんた忘れ物してたわよ」

「あら、気付かなかったわ」

そういつてまたすぐ消えていく。時間を止めてるらしいが。率直な感想を言うところの人は従者の鏡だな。苦労してる姿を誰にも見せない、どこことなく懂れる。

でも霊夢と話すときは結構普通の話し方なんだ。仕事モードとかあるのかな？

「咲夜、お昼ごはん余ってるんでしょ」

「やっぱりそっちが目的なのね」

うちの巫女にも見習ってほしい。

結局ご馳走になってしまった。おいしそうなものを見るとついにお腹の音が……

そういう問題でもない気がする。

「おっす祠雷、昼飯は済んだのか？」

魔理沙だ、手に持ってる本は図書館とやらの本か。

「まあ、もう食べたけど」

「よし、ご馳走になるとしますか」

思考回路を見てみたい。

でも図書館……やっぱりでかいのかな？ 興味はあるけど――

「霊夢、図書館ってどこにあるの？」

「咲夜にでも案内してもらいなさい」

「それは悪いだろ」

「あら別に構わないわよ」

いつの間にいるんだよ、もう。心臓に悪い。

「いいんですか？ そんな道さえ教えてくれればいいんですけど」

「私がついてった方が話が早いだよ」

「じゃあ私は魔理沙とくつろいでるから、あつ、そうそう今日はここに泊っていくことにしたから」

……話について行けない。

「お嬢様があなたに興味があるらしいのよ、帰してしまったら後が怖いわ」

興味があるねえ、どんな意味でだろ……ちょっと寒気がしてきた。

「まあそれだけ時間があるんだし、図書館でも探検してきなさい、外の世界の本もあるみたいだし、結構広いから退屈はしないはずよ」

それは魅力的だな。

「案内するわ、ついてきて」

「あつ、はい」

一言感想、広い。

いや、この大きさの図書館なんて外の世界にもねえよ、全部読むのに千年単位でかかりそうなくらいの大量の本。どうやって集めたんだろうか？

「パチュリー様、例の外来人でございます」

「ああ、レミイが言ってた人ね。どっかのコソ泥ネズミみたいなことしないんなら別に好きに見ていくといいわ」

「じゃあ、伝えておきますわ」

「そうね、小悪魔にでも案内させたらどうかしら。もうじき戻ってくるのだし」

「わざわざいいんですか？」

「いいのよ、迷子になられても困るし」

「パチュリー様、お茶ですよ」

「ほら、言った通りじゃない」

「あれ？ お二人で何の話ですか」

そう言って小悪魔はティーセットと抱えた大量の本を置いた。

「これ頼まれてた本です」

「そう、小悪魔、今暇かしら？」

「はい、何か用ですか？」

「レミイが言ってた外来人いるでしょ、図書館を案内してあげて」

「はい、いいですけど」

「じゃあお願いね、レミイのお気に入りらしいから迷子になって全員で探す、なんてことないようにね」

咲夜さんにはここで待っててって言われたけど……あ、戻ってきた。

「祠雷、もう少ししたら案内してくれる人が来るから、もう少し待ってて」

「案内の人？誰ですかそれ」

「正確には人じゃないけど、まあこの司書ね。それと私に畏まる必要はないのよ。霊夢だってそうじゃない」

「はあ、じゃあありがとう、でいいのかな？」

「その方が楽だわ、それじゃあね」

そう言ってどっかに消えてしまった、でもため口ってなんかなあ。

「あっそうそう小悪魔」

「なんですかパチュリー様」

「一通り案内する前に私の所に連れてきてちょうだい」

「わかりました」

ん、誰か来た。

「はじめまして、私はこの図書館の司書をしております、小悪魔



と呼んでください」

……小悪魔ねえ、漫画の世界から出てきたような悪魔だな、羽とかなんか可愛い形してるけど。

「こちらこそはじめまして、神依崎祠雷といいます」

「あの、案内する前に、突然なんですがパチュリー様に先に連れてくるように言われていて」

「パチュリーさん、ですか？ そちらのかたは誰なんでしょうか？」

霊夢とかがちよくちよく名前だしてたけど。

「まあ、私の主だと思って下されば」

「そうですか」

ますますどんな人かわからなくなった気がするけど。その前に人なんだろうか？

「あの、一旦パチュリー様のところへ……」

「別にいいですけど」

「でしたらこちらですので付いてきてください」

「はい」

これは変なフラグとかじゃないよな……突然お呼びがかかるなんて。  
なんか不安になるよな、この状況。

## 紅魔館へ行こう（後書き）

テストが2つの意味で終わりました。

うちの国語の先生に伝説があるんですよ、前の学校で平均点28点のテスト作って保護者から苦情来たっていう無駄に要らない伝説がww80取ればヒーローですよ、ほんとに。

私情失礼しました。

紅魔館編に突入しました。実は咲夜さんファンなんですよ。↑関係ないです。

もちろんただでは済みません。でも次はいったん主人公のプロフィールとかまとめてみたいと思います。

ですが感想でもあったんですが主人公の家族関係とかはあまり触れないようにお願いします。あとから詳しくわかっていくんで、特に父親との関係は。

回想で少し出てきたと思いますが気になるところがあっても気にしないでください。

## プロフィール（前書き）

オリキャラですのでやはり少しはまとめておこうと。  
というわけです。

## プロフィール

主人公プロフィールです。

・名前 神依崎祠雷      ・性別 もちろん男です。

・年齢 13歳

・身長体重 155cm      43kg

・特技 木登り サッカー ブラインドタッチ

子供のころから父親に格闘技は教えられていたので柔道、空手、剣道は一通りできます。

プロレス技もある程度は。

・趣味 ガンマニアでほとんどの銃は見ただけで特徴その他が言える。

父親仕込みの射撃の腕前。一通りの実銃は使いこなせる。何気に気に入っているものは設計図まで暗記しているほど。自分好みに改造するのはお手の物。

・外見 目つきが悪いため睨んでいると勘違いされがち、そのせいかクラスメイトもあまり寄りつかない。

問答無用で人を近付けないオーラがあるが本人はそんな気

はない。

顔つき自体はかつこよさで言ったら偏差値55程度。

・性格 自問自答が多い、勘はかなりいい方で本人も自覚している。誤解されがちだが別に冷めた性格でもなく冷静なものを見られるだけ、客観的なところも。

しかし一度取り乱すと戻れないところもしばしば。

空気を読むことに関しては一級品。その場の雰囲気から何も言われなくてもある程度は読み取れる。

・服装 黒い服しかもっていない、それは明るい色が似合わないのを自覚しているため。

ジャージにトレシューは標準装備。

・能力 「電気を操る程度の能力」

電気なら携帯の充電から雷まで。さらには電気信号まで。

本人が気づくのは少し先だが。

光に関してはそこまで複雑には扱えない、せいぜい付属品程度。

理数系に関しては独学で教師をも圧倒する博学で能力も本人とは相性がいい。

スペルカードに関してはまだまだ修行が必要。

弾幕もまるで雷のように動かせるが、まだまだ修行不足。

## プロフィール（後書き）

こんな感じです。ちなみにですが友人関係はほぼゼロです。

これからどんどん新しいことが分かっていますので本文の内容だけではありませんが。

次回からは本編に戻ります。



**弾幕ごっこですか……（前書き）**

紅魔館編の続きです。

流れとかちよつと無茶してるかも。

**弾幕ごっこですか……**

「パチュリー様、よろしいですか？」

「入って」

小悪魔に連れられてパチュリーという人？ の部屋まで来たが……  
見かけは普通の女の子だな、パジャマみたいな服装をして本を読んでいる。

「パチュリー様、こちらが神依崎祠雷様です」

「あの、様なんていいですから普通に名前で呼んでくださると」

「ああでしたら私のことも霊夢さんたちとおんなじように話しかけて下さい、祠雷さん」

でもさんをつくんだ。まあいいけど。

「もういいかしら」

「あっ失礼しました、祠雷さん、こちらがパチュリー様です」

何か淡々とした話し方だな、俺ってこんな風に見えてたのかな？

「はじめまして、あなたは祠雷でいいのよね」

「はい、こちらこそはじめまして」

「早速だけど少しいかしら、これが終わったら好きに図書館の中を探検していいから、小悪魔、もういいから後でまた来て」

「はい」

そう言って小悪魔が出て行ってしまった、正直気まずい。

「あの、俺に何の用でしょうか」

「あなた外の世界から来たのよね」

「ええ、まあ」

「外の世界の本で調べ物をしたいんだけど、専門用語が多くてね、解説してほしいところとかがあるのよ」

「ああ、でしたら手伝いますよ。どんな本ですか？」

「これとこれとこれなんだけど」

そう言ってパチュリーが見せてきたのは、理科関係についての本だった、これなら俺の専門分野だ、確かにいきなり言われてもわからない言葉もあるだろう。お任せあれだ。

「じゃあまずこの本からお願い」

「ああ、まずここですか？　これはですね……」

「そういうことね、ありがとう、もう大丈夫だわ」

「じゃあ俺はこれで」

……待てよ、いつの間にか友達みたいに話してるんだけど、まあこれこれ1時間話してたらそうなるもんなのかな。

しかし懐かしい、昔は勉強大好きでこういう本でよく勉強したものだ。

そして本のページをめくっていくと気になる単語が。それは――

### 『電気信号』

これは、もしかして俺の能力で電気信号を操れば動きを封じたりと  
かできるんじゃないか？

修行できる機会があったらしてみよう。当分先になるかもしれない  
けど。

「もうじき小悪魔が来るから、まって。」

「わかった」

やっぱり普通にため口になってる。まあ親善の証ということで。

「祠雷さん、おまたせしました」

お、小悪魔が来た。

「じゃあなパチュリー」

「それじゃあね」

そう言って俺はパチュリーの部屋を後にした。

「ずいぶん仲良くなれましたね」

「結構真剣に話し合ってたからなあ」

「うらやましいです」

「そうか？」

「はい、私なんて最初は全然相手にされなかったんですよ」  
そうだったのか、皆いろいろ大変なんだな。

「それはそうとどんな本が読みたいんですか？」

「やっぱり外の世界の本とか」

「じゃあこっちはです、ついてきてください」

気がついたらもう夕食時だったのか、咲夜が迎えに来てくれた。

俺がテーブルに着いた頃にはもう皆揃っていた。

「最後のゲストの登場ね」

霊夢なんか早く食べたそうにしてる。レミリアさんって普通のもの食べるんだ、吸血鬼なのに。

「それじゃあいadakimashouか」

やっぱり今まで食べたことない味だ、霊夢がたかる気持ちも今ならわかる。

「そういえばお嬢様、今日は何で私も一緒なんですか？　いつもは門のところで食べてるのに」

美鈴さんって門の所でご飯食べてるのか、仕事熱心なのかわかん。

「ああ、それはあなたにも関係ある話があるうからよ」

話って何だろう？

「霊夢、あなた祠雷の実力をうちの門番ならいい勝負にはなるかもって言ったわよね」

「ん？ 現にやりあえる実力はついていると思うわよ」

いやな予感しかしねえ！

「祠雷はまだ素人よ、でも実力を見ておきたいのよ。だから二人の弾幕ごっこを見たいってわけ」

「え、あの、ちょっとm」

「いいんじゃない」

いや霊夢、簡単にいいとか言わないで。

「あら、面白そうなこと言うわね」

パチュリー！ 頼みの綱は……小悪魔くらいか。

「そんな、大丈夫なんですか？」

ナイス小悪魔！

「祠雷なら大丈夫だぜ」

……

「私は別にかまいませんけど」

これは……逆転不可だろ。

「決まりね」

場所は紅魔館玄関前、ギャラリーは夕食のメンバー。

「ところで祠雷さんはスペルカードとかあるんですか？」

「あ、5枚ほど」

「うーん、それじゃあ勝負になりませんねえ、どうしましょう」

「スペルカード無しでいいんじゃない？ 5枚はさすがにジリ貧よ」

「それだ！ そうしましょう祠雷さん、そうしたら公平です、いいですよねお嬢様」



「別に構わないわ」

「では始めましょうか」

「はい」

しかし、そんなルールは意味がなかった、なぜなら……

「ハア！」

美鈴の上段蹴りを両手についてしゃがんで避ける、そしてそこからの足払い。

それを美鈴は後ろに避けて、起き上がりかけている俺に強烈な右フックを繰り出した。

俺はその手をつかみ背負い投げへと派生させる。しかし美鈴は途中で俺の手を振りきり地面を転がって距離を取る。

そこへ追い打ちをかけるように踵落としをするが、横によけられ顔面狙いのストレートで返される。

俺はバク宙で後ろに跳びつつ美鈴の拳を蹴って距離を取る。

「やりますね」

「それは俺のセリフだ」

そう、途中から弾幕関係なしの格闘勝負になってしまったのだ。

「うーん、ガチで殴りあったら勝てる気がしねえぜ」

「それは私のセリフよ、あんなに動けたなんてね」

だめだ、やっぱり体力が違う、でも俺だって伊達に鍛えてないぞ！

俺の十八番の決め技をかける、空中回転からの踵落としだ、とはいっても素直に当たってくれるほど甘くはない。

美鈴も着地の隙について正拳突きをしてくる、横に回って回避する、まわってばっかで目が回ってくる。

「咲夜、どう見る？」

「とても13歳の人間には見えませんね、能力抜きに美鈴とやりあえるのは。ただ……」

「手がもう少し長ければもう少し選択肢も広がるのに、もったいな

いわね」

「それでも格闘技に関してはかなりの英才教育を受けていますね。種族を超えた実力を持っていますし、見ていても隙と呼べる隙がありません」

「なかなか面白いじゃない、本当に見込みがあるわ、私のものにしてしまいたくらい」

「だめですよ」

「わかってるわよ」

牽制変わりのパンチを入れる、美鈴はフックで返してきたが読み通りだ。

空を切った美鈴のパンチは体重を大きく前に傾けた。

「隙あり！」

低い姿勢のまま両手をつき、腹に蹴りをれた。

「ッ！！」

苦しそうに顔を歪ませる美鈴に追い打ちの回転蹴り。勝負ありか。

「勝ったわね」

「美鈴も格闘技だったら十分な実力はあるはずですが、手を抜いたわけでもないみたいですし」

「本当に面白いじゃない」

「ううー、さっき食べたご飯全部出しそう」

「疲れた、汗だくだよもう」

「今日はいいもの見れたし、ついてきて正解だったぜ」

「紫も多分どっかで見てるんでしょうね」

「どっかの天狗に隠し撮りとかされてたりしてな」

「あり得るわね」

その後、俺は風呂に案内され、部屋にも案内された。  
そして高級ホテルみたいな豪華さでビビって逆にくつろげなかったりした。

そして就寝。

ベットがふかふかだー、とかやってるうちに寝ちまったらしい。  
疲れてたのかな、やっぱり。

ああ、今日も一日大変な日でしたー

**弾幕ごっこですか……（後書き）**

フランちゃんは自室待機です。

いや、出したかったんですよ、ほんとは。

まあ次の機会に。

なんとなく次の回の冒頭が見えてきてる方も多いのではないでしょうか。

まあ、テストも終わったので早めに出来上がると思うのですが……

## いろいろある日（前書き）

風邪ひいてもうた、初雪もあったし寒くなってきたからかなあ。

サブタイトルはそのままです、はい。

## いろいろある日

『噂の外来人、紅魔館の門番に勝利!』

どうしてこうなった。

「撮られてたのね」

この文々。新聞というものは天狗が発行している新聞らしいのだが。

「この内容はオーバーすぎるだろ」

「半分はでたらめなのは皆知ってるから大丈夫よ」

紅魔館から帰ってきて一息ついていたところの全然好ましくないニユースである。

「でたらめにも程がある」

「いい勉強になったじゃない、この新聞は信じてはいけませんって」

「なんだかさっきからひどい言われようですね」

ん？ 今のは誰の声だ？

「どうも幻想郷の清く正しいブン屋こと、射命丸 文です。今日は



噂の外人さんに取材に来ました」

……

……

「はあ」

「あつ、今溜息つきましたね、聞きましたよ！」

そこには黒い羽のペンを持った女の子がいた。

「帰りなさい」

「ひどいですよ、お話くらい聞かせてくれても」

「祠雷、こいつの笑顔は営業スマイルだから騙されたらだめよ」

「私の印象どんどん悪くしてませんか」

「よくわかったわね」

いまいち展開について行けてない。要するにこの人は何なんだよ。

「それでお話を聞かせてもらえないでしょうか」

「あの……とりあえずあなたは射命丸さんでいいんですよ、とりあえずお話とは？」

「取材ですよ取材、明日の文々。新聞に載せる記事にするんですよ」

こいつが犯人か。

「あんなでまかせ書いたのはあんたってことか」

「失礼な、ちゃんと現場にいたんですからね、写真もちょうど蹴りが決まったところじゃないですか」

「誤解される書き方を止めて下さい、あれじゃあ俺がとんでもなく強い人みたいになってるじゃないですか」

「はいはい、いったんストップ。今日は何の話を聞きに来たの？話はそこからよ」

確かに、それが先だ。

「ああ、今日はその強さの秘密と、あとはどうしてここに来たかです」

「そして話したことに上乗せされて乗るんだろ、いやです」

「そう言われて黙って帰ると思いますか？」

「俺じゃなきゃだめなのか？」

「もう記事は決めていますから」

はあ、何でおれはこういうのに弱いんだろう。

「わかりました、もう折れます」

「では早速お伺いいたします〜♪」

「いいの？ 祠雷」

「俺は押しが強いのは苦手なんだよ……」

「なるほど、小さい時にお父様から」

「そう、他にもいろいろ仕込まれた」

「それでここにいるのは強くなるためと」

「まあ、そう言うことかな」

今思うととんでもない理由だな。

「お話ありがとうございました〜」

「へえ、じゃああんた小さい頃から物騒なもん扱ってたわけね」

「まあ小学生のうちから実銃扱ってたしそうなるわな」

「以外に修羅場超えてんのね」

「あんまり触れてほしくないけど」

ちなみに次の日の新聞はまともだった。

それから1週間。

俺は、飛ぶ練習の真っ最中である。まあ射命丸が飛んでるの見たら  
飛びたくなるのもわかるだろ？ な？

「そうそう、よく飛べてんじゃない」

「あー、何となくコツがわかってきた」

（美鈴との勝負から伸びが早いわね、やっぱり自信がついたただけでも違うのかしら）

慣れてくると本当に簡単なもんなんだな。空中回転お手の物、急降下とかもできちゃう。地味に怖いけど。

「これで今度からあんたもお使いにだせるわね」

「最初からそれ目的だろ……」

（これくらいできたらお使いに行かせても食材は安泰ね）

「もしもしあんたは心の声のつもりかもしれないがバツチリ口に出てるぞ」

「ハッ！　しまった」

「何がしまっただよ、おもいつきしさぼる気満々じゃねえか、ここ1週間、弾幕ごっこにも妙に熱心に特訓してくれると思ったらそう言う目的かよ」

「最初に助けたのは誰だっけ？」

「ごめんなさい……（尻に敷かれるってこんな感じなのか？）」

その様子を影から見ると人影が一人。

「あやややや、完璧にパシル気満々ですねえ。1枚撮るときですか」

そのあとの射命丸の運命は言うまでもない。

「しかしねえ、祠雷もそろそろ人里に慣れてもらおうと思うわけよ」

「はあ」

「あんたの実力はここ1週間で本当に伸びてるわ」

「そしてその間の霊夢のお茶タイムが増えるわけですね」

「そうそうよくわかったわね」

「言っちゃいますか」

「祠雷もいつまでも独り立ちできないのはいやでしょ」

それはそうだけど俺は何にも知らないのに……

「地図の通りだから、お願いね」

「いきなりは早すぎるだろ」

「親切な人も多いし大丈夫よ」

……恨むぞ霊夢。

どこが地図に書いたとおりだよもう。さっきから迷いっぱなしっだぜおい。

……もしかしてあの姿は？ やっぱりだ、助け舟登場だぜ。

「おーい、魔理沙ー」

「おお、誰かと思えば祠雷じゃねえか、ちょうどいい、用があるんだよ」

「用？ とりあえず買い物手伝ってからにしてくんね？ 迷っちゃってさ」

「おしわかった。じゃあ先に買い物手伝ってやるから、まずはどこだ？」

「助かったよ魔理沙」

「いいってことよ。困ったときはお互い様だぜ」

「そんで用事って何？」

「ついてきてほしいんだぜ、報酬も弾むぜ」

報酬もあるのか、何なんだろう？

「早く行こうぜ」

そう言って飛び立つ魔理沙、けどすぐに引き返してきて……

「あっちゃー、飛べないんだっけ？」

「ああ、もう大丈夫、なんとか飛べるようにはなったから」

「おお、いつの間にか進化してるぜ、まあとりあえずこっちだぜ」

そう言って魔理沙が飛んでいったのは……魔法の森か。

グズグズしてるとおいてかれそうだ、全速前進！

「……おい、ちょっと待ってー！」

速度ではかありません、はい。

何とかついて行ったらそこには1軒のお店があった。

香霖堂。それがお店の名前だった。

「霖之助ーいるんだろー」

中はいろんなものが置いてあって何の店なのかいまいちわからないんだが……



「やあ、魔理沙じゃないか、何か用かい？」

「あの話、覚えてるだろ？」

「ああ、ここにある機械を動かせそうな人に心当たりがあると」

「それがこいつだ」

魔理沙と話しているのはメガネをかけた男の人で不思議そうな眼でこっちを見ている。

「えっと君、名前は？」

「神依崎祠雷です」

「僕は森近霖之助、ここの古道具屋の店主をやっている」

古道具屋だったのか。

「それで君は本当にここのものを動かせるのかい？」

「えっと、具体的にどんなものをでしょうか？」

「とりあえずここに置いてあるものなんだけど……」

「祠雷なら動かせるだろ、電気を使えるんだし」

「もしできたのならお代は弾むよ」

そう言っで見せてきたのはパソコン、テレビ、その他e t cの電化製品だ。これくらいなら動かそうだけど……

「多分できると思います」

「本当かい！？ だったら手始めにこれから頼むよ」

あれ？ いつの間にか手伝うこと前提になってるような？ まあ別に構わないんだけどさ。

えーと、このパソコンはここから充電できるんだな。

指から電気を出して充電していく、直流交流なんでも来いだぜ。

スイッチ、オン。

一通りのものを動かすと霖之助さんは感動のあまり。魔理沙は何がどうなっているのかわからないという顔をしている。

「あの……どうしたんですか？」

「いやー今日はいいもの見せてもらったねえ」

いいものだったんだ、まあ電気がないのも事実なんだし電化製品が動いてるのを見るのも貴重な体験なんだろうな。

「あっそうそう、これはお礼だよ。」

そういつて霖之助さんが渡してくれたのはお金、どんぐりの価値なのかは知らないが。

「すげえ！　こんな大金持ってたのかよ」

「失礼な、僕だって金銭面では余裕があるよ」

「魔理沙、どんぐりの金なんだ？」

「そんだけあったら2年間それなりの食事ができるぜ」

「僕の長年の夢をかなえてくれたんだ、このくらい軽いものだよ。ここにあるものが動くのを見るのはね」

「じゃあ時間とらせたな、悪かった」

「僕からもお礼を言おう、また暇な時にお願いできるかい」

「ああ、大丈夫です」

ああ、俺こういうことしたら親しくなれるスキルとかあるのか。

「じゃあお邪魔しました」

「いつでも歓迎するから」

予想外の収入があったな、霊夢を待たせても怖いし早く帰ろう。

## いろいろある日（後書き）

文編、こーりん編、成長編の急展開を無理して詰め込んだ回です。

作者に、もう少しゆとりを持ってと期待してもいけません。  
文章力分けてくださるのなら別ですけど……

**決闘！　そして永遠亭へ　（前書き）**

すぐに終わるバトル回、もう少し長くした方がいいかも……

なんか淡々としてるし。

決闘！　そして永遠亭へ

「ああ、もう日が暮れてきた、霊夢に怒られるようう」

帰路が渋る。

「霊夢　宴会開いてくれよう。最近全然ないじゃないか」

話し声が聞こえるな。

「私も暇じゃないの、地底でお仲間と飲んでなさい」

「霊夢がグレた」

「何がグレたですか」

「でも最近少ないわね、あの外来人さんのお世話にしても程があるんじゃない？」

知らない声が2人ほどいるけど、誰だろう。

「霊夢、帰ったぞー」

「あら、ずいぶんと遅いじゃない、何かあったの？」

「いや、その前にその二人は誰？」

「ああ、知り合いよ知りあい」

「言い方がひどいわね」

「それよりもこいつが霊夢ぞっこの外来人かあ」

「次言ったら殺すわよ」

えーと金髪のお姉さんと角が生えた子供ねえ、幻想郷らしい。

「まずは自己紹介からかしらね、私はアリス、あなたのことは知ってるわ」

周りの人形はどうやって動いてるんだろう？ 気になるときだけど。

「あたしは伊吹萃香、鬼の四天王だ」

「神依崎祠雷です」

「そんな畏まらなくてもなあ、仮にもこれから決闘するんだし」

ん？ 今さらりと恐ろしいこと言ったような。

「あの……決闘って何？」

「強い強いと言われている奴と戦わないわけにはいかないからねえ、あつもちろん弾幕ごっこじゃないからね」

「おい霊夢！ 何か言ってくれ！」

「あら、いろいろお酒も土産にくれたんだしいんじゃない？」

買収されやがった。

アリスさんは笑顔でこっち見てるしどうしよう。打つ手なしかよ。

「大丈夫、医者になら運んであげるから」

「俺の中では十分それでも手遅れだよ！」

「霊夢、あんまり無理いってもよくないんじゃあ」

「大丈夫、美鈴に勝ったやつなんだから」

「そう、ならいいけど」

良くありませんから、もう少し粘ってほしかった。もういい、死亡フラグは十分に立った。

「そうだ、とりあえず買ってきたもの置いとくから」

ああ、なんでこんなに冷静でいられるのか。俺の七不思議。

遺書書いておけばよかった。



「よろしくね、祠雷」

「ああ、鬼って言うくらいだからすんげえ怪力なんだろう？　もう死んだ」

「あら、これあんまり日の当る所に置いておいたらだめなんじゃない？」

「あら、忘れてたわね」

「上海、おいできて」

「ジャンハイ！」

人形に命令したらやってくれるのか、便利そうだな。その調子にこの勝負までどっかに運んで行ってもらいたい……

「じゃあいくよ」

「畜生、なるようになれ！」

宣言したとおり、萃香からかかってきた。

萃香のパンチをかわすと地面に突き刺さる。地面に大きな穴があいているところを見ると相当な力であろう、まともに食らったらやっ  
てられない。

隙をついて蹴りを入れてみても何にも動じない、本気の一撃でないと通用しないか。

迫ってきた萃香の横をくぐって後ろからふくらはぎを蹴り飛ばす。軽い膝カックンだ。

そのままもう一発、というわけにもいかずすぐに立て直される。

フック、回し蹴り、叩きつけるような連撃だけど……

俺には全部見えてんだよ！

萃香のパンチを腕を全力で引くことで受け止め、衝撃をすり抜けさせる。これを食らったやつは面食らって動揺するもんなんだけど……

決まった！ 驚いた顔してる。そこで腹に蹴りあげを入れる。

続けざまのひじ打ちで叩きつけ……られない、さすがに甘くない。

けど収穫はある、萃香がいくら怪力だからって当たらなければ意味がない。そう、あくまで当たらなければの話だけだ。

「なかなかやるねえ、それでこそ腕が鳴るってもんさ！」

「そいつはどうも」

「本気で行かせてもらおうよ！」

ッ！ 今までののがお遊び程度に感じ入るくらいの速さ、比例して威力もさっきまでの比じゃないだろう。

ブレインシェイクの一つでも決めさせてもらえばいいんだが……  
というかそれぐらいしないと効果がなさそうだ。

中段蹴り、受け止められる。顔狙いのフックをマトリックスで流す、その手を掴んで投げ飛ばす。飛び蹴りで追い打ちしてもダメだった。素早く起き上がって回避される。

「あら、本当に強いわね」

「それよりおいしいわねこれ」

のんきに饅頭を食べている。

「仮にもあんた同居してるんだから応援ぐらいしてあげたら？」

「あいつは大丈夫よ、そう簡単に死にはしないわ」

「そう言う問題なのかしら」

「それに萃香も能力使ってないでしょ、そのくらい熱中させる力があるのよ。」

「なるほど」

拳同士がぶつかりそうになる、インパクトの直前でパーに変えて横に払う。

萃香が右手を大きく開く不格好な格好になる。腹に蹴りこむと以外に吹っ飛んで行った。

それでも全然ダメージは通っていないようだが。

しかしもう体力的にもう限界が近付いてきた。

その結果は甘い一撃を繰り出す。完全に胴がガラ空きになる。

そこを見逃してもらえろほど甘くはない。

華麗にパンチが決まって……

「ッ！」

声にならない悲鳴が出る、そのまま遠くに飛ばされる。

だめだ、もう意識がもちません。ああ、名前を呼ぶ声が聞こえる……

「やりすぎよ萃香」

「悪い悪い、つい熱くなっちゃって」

「これは永遠亭に直行かしらね」

目が覚めると博麗神社ではなかった、ここはどこなんだ？

部屋は割と散らかっていて、よくわからないものもたくさんある。

今の状態を一言で表すと、全身が痛い、打ち身でもしたんだろうか？ 萃香に吹っ飛ばされて相当強く打ったし。治療の跡があるけど、とりあえず部屋の外に出てみよう、誰かいるかもしれないし。というかなんでこんな所にいるんだろう？

ガラッ。

障子をあげようとした時に鉢合わせしてしまった時の気まずさを体験したことがあるだろうか？ 俺は現在進行中で体験している。

「あら、目が覚めた？ 本当にタフなのね」

「あなたは誰ですか？」

「八意永琳、ここで医者をしているわ。あなたのことは霊夢から聞いているから」

「じゃあこの治療の跡は……」

「私よ、別に気にしないで。霊夢とは面識もあるし」

「はあ、それより霊夢は？」

「ご飯食べてるけど」

「心配もなしか」

まあいつものことだから別にもう気にしなくなってきたけど。

「それよりあなたも起き上がれるなら何か食べたら？」

うーん、霊夢とも親しいみたいだしお言葉に甘えましょうか。

「じゃあ、お願いします」

そう言って通されたのは居間のような所で、霊夢が堂々と食事中だった。

「あら、起きたの」

「大丈夫もなしか」

「失礼ね、誰がここまで運んであげたと思ってるの？」

何となく予想してた答えが返ってきた。

「ほら、あなたの分も用意してあるから」

「あっ、ありがとうございます」

食事が終わると診察室に通された。

「一通り見たけど大丈夫そうね、しかし鬼の一撃を受けてそれなんて、あなたなかなかタフね、本当に」

「ちゃんと受け身は取りましたから」

そう言う問題でもない気がするが。

「まあとりあえず痛み止めとか渡しておくから。うどんげ、持ってきてちょうだい」

そう言うって奥のほうに呼びかけるとうさ耳ブレザーの女の子が出てきた。

「紹介するわ、私の弟子の鈴仙・優曇華院・イナバ。みんなはうどんげって呼んでるわ。」

「師匠、初対面の人にあだ名を紹介するのは……まあとりあえずよろしく願います」

「こちらこそ、神依崎祠雷です」

そのあとはほとんど雑談になった。

泊まる部屋まで用意してくれたらしい、夜遅いし助かる。

「じゃあ案内してあげて」

「はい、こっちですよ」

通されたのは和室だった。建物に比例する広さで一人では持て余す

くらいだ。

「じゃあ私はこれで」

いつの間にか俺までうどんげって呼ぶようになってしまった。まあ気にしないでおう。

「眠い、今日は早めに寝とくか」

永遠亭での1日目が終わった。



**決闘！　そして永遠亭へ　（後書き）**

もう少し一つの話を長くしようかな？  
的なことを考える作者。

次回も永遠亭です。もこたんの口調は原作口調でいいかな？  
たぶんそうなります。

## 宴会デビューだぜ！（前書き）

すいません、もこたん出す的な感じ出しましたが出せませんでした。

また今度です。

**宴会デビューだぜ！**

「霊夢なら昨日のうちに帰ったわよ」

「あの薄情者……」

いつものことだし気にしないけど。ああ、このセリフ何回目だっけ？

「ところで今暇？」

「暇じゃないわけじゃないですか」

「確かにそうね、悪いけどうどんげを呼んできてくれない？ たぶん部屋にいると思うから」

「部屋の場所知らないんだけど……」

「廊下の突き当りの部屋だから、間違えることはないと思うけど」

廊下の突き当りね……

「うどんげ、入るよ」

「あれ？ 部屋教えたっけ？」

「永琳が教えてくれた」

「なるほど、入っていいですよ。しかしあなたもなじむのが早い……出会って2日で師匠を呼び捨てですか」

なじむのが早いねえ、外の世界ではそんなこと全然なかったけどなあ。一方的に避けられてる感じもしたし。

「それより呼ばれてるけど」

「ああ、それで」

部屋に入ると真っ先に入ったものがある。それは……

「この銃本物だよね、どうしたの？」

「それは昔私が月にいた時代のもですよ、というか見ただけで本物かどうかわかるんですか」

「いや、雰囲気で」

しかし月にいたねえ、兎なんだし幻想郷では普通のことなのかな？  
どっか聞いてほしくないオーラもあるし、スルーするか。

「聞かないんですか」

「聞いてほしくないんだろ」

……やっぱり凶星か。気まずいし話題を変えるか。

「外の世界では見ないタイプだ、形からするとアサルトライフルか」

「詳しいの？」

「7つの頃から実銃扱ってる」

かなり微妙な顔されたな……

「ちょっと触らせて」

「いいけど」

わざわざ投げてよこしてくれた、マガジンを抜いたら弾は十分に残っている。

「撃ってみていい？ 実力には自信があるんだ、こっちのものも使ってみたいし」

「別にいいですよ、私にはもう無用のものです」

「何か的になるもの無い？」

そういうとうどんげは机の中を探り始めた。

「余ってる仕切りが」

15×30くらいの木の板だ、久しぶりだけどなまっていかな？

思いつきりその板を空に投げつけた、うどんげは驚いた顔をしてる

けど気にしない。

その板をイメージしたとおりに撃ち抜いて行く……うまくいったか？  
落ちてきた板を手取る、成功だ。

「ほら、兎だ兎」

兎の顔の形に形を抜いた。若干ずれてる所もあるけど気にしない。

「年齢ごまかしたりしてない？」

「いや、まだ二十歳にもなってないひよっこだよ」

「私何年もかけて練習してもそんなことできないのに、これが才能とか……」

「俺だってスパルタされてきたんだから変わらない……そういえば  
永琳」

「！ いけない、師匠のところに行かなきゃ」

どたどた走って行った。そんなに急ぐ必要があるんだろうか。

永琳と二人きりの診察の時間だ、とはいってもほとんど必要ないらしいけど。

「随分と立派な腕をお持ちね」

「見てたのか」

「ええ、新聞に書いてある通りの射撃じゃない、兎の顔なんて」

「これでも外の世界には俺モデルもあるんですよ」

「なかなか凝ってるのね、紫にでも頼んだら持ってきてくれるんじゃないかしら」

「誰ですかそれ？」

「あら、まだ面識はないの？ まあ明日の宴会に来ると思うから、たぶん会えるわ」

「宴会？」

「最近はあまりないけど、博麗神社では結構頻繁に宴会があったのよ、3日に1回くらいね」

宴会って、萃香が言ってたのはそれか。てか明日なのか。

「じゃあお世話になりました」

「気をつけてね」

ああ、懐かしの博麗神社……ちと大げさすぎたか。けど何とか帰ってこれた。

「ただいま霊夢」

「あら、一人で来れたのね」

「心配するんなら待っててくれよ」

「いやよ、面倒臭い」

やっぱりそうなるのね。

「そうだ、明日の宴会のことは」

「永琳から聞いてるよ」

「もう買い出しとかは終わってるから、あとは会場作りね」

「会場作り？」

「普段はそんなことしないんだけど、プリズムリバーが来ることになったの」

「プリズムリバー？」



「外の世界で言う音楽団みたいなものね」

幻想郷にもそんなものがあるのか。

「ほんと何で来ることになったのかしら？ 不思議でたまらないわ」

俺に聞かれても困るような気がする。

「まあうだうだ言っていないで始めましょう、宴会は明日の正午から、それまでに作るわよ」

つまり昼間からどんちゃん騒ぎするってことか、さすがに俺だって慣れてきた。週間とかって怖い。

というか皆未成年だよなあ。俺は赤ワインとかちよくちよく貰ってたから飲み慣れてるけど……でもそれもおかしいんだよな。

「よし、とりあえず日が暮れる前に終わらせよう」

結局夜までかかるんだけどな。

次の日。

一番乗りは魔理沙だった。

「おっす、今日は早めに来たぜ、いっつもそうだけだな」

「まだ3時間もあるぞ」

「魔理沙は早めに来てお茶でもたかる気なのよ」

霊夢さん、嫌がつてるけどあんたも同じことしてるんだよ。

「まあ、とりあえず時間まではゆっくりしようぜ」

ここは図々しい連中が集まるところなのか。

日が昇るにつれて集まってくる人数は比例してくる。  
今は30人くらい、見知らぬ顔も増えてきた。

「プリズムリバーも準備ができたし、そろそろ始めましょうか」

霊夢が宣言したら5分とたたないうちに騒がしくなった。

「祠雷くお前も飲めよ」

萃香に絡まれた。

「俺だってこれから飲む、残念だけどワインしか飲めないからな」

「贅沢だねえ、まあ1本くすねてあるから飲みなよ」

「悪いな」

騒がしいのも悪くない、外の世界でも楽しめていたら俺はもう少し違っていたのかな？

「祠雷、プリズムリバーの演奏がが始まるぜ」

萃香に言われて気が付く、昨日作った簡易ステージに3人の人影がある。

「しかし魔理沙も手当たり次第に声掛けてるな」

「魔理沙が連れてきたのか」

「お代は酒と食べ物らしいぜ」

「いろんなところから食べ物が集まるからな、魅力的に映るのは確かだろ」

「そうだ、この前は大丈夫だったのかい？」

「今頃か、まあ永遠亭の治療が良かったのかもしれないけど、五体満足さ」

「それは良かった」

プリズムリバーの演奏が聞こえてくる、確かに呼んで聞く価値は十分にあるな、さすがは幻想郷、というのはあまり関係がないか。

すると萃香がきよろきよろし始めた、そして何も無いところに向かって突然……

「紫、隠れてないで出て来い」

「おい、そっちには誰もいな」あら、ばれちゃった」本当にいた！」

「あれだけ気づけオーラ出しておいてそれはないだろ」

「まあいいわ、用があるのはあなたじゃないの」

誰だこの人は？萃香の知り合いか？

「はじめまして、私は八雲紫。一応あなたの恩人なのよ。祠雷さん」

この人が永琳の言っていた紫さんか。しかし恩人とは……？　というか俺の名前も知ってるのか。

「あなたが幻想郷に来た日、私はあなたを見つけた。能力もちだったしなかなか可愛い顔してるから、霊夢に助けるようにそそのかしたのよ。彼を助ければ後々いいことがあるってね」

それつまり霊夢が現金なやつってことじゃあないのか？　　というか可愛い顔って言われたの初めてかも。

「まあ、とりあえずお礼は言ったほうがいいのかな？」

「そんなものいらないわよ、それよりもお願いを聞いてくれたほうがありがたいんだけど」

「祠雷、ろくな願いじゃない確率のほうが断然高い、裏があるかもしれないから気をつけろよ」

「まあ、今は宴会を楽しみましょう。終わり次第神社の前で待っているから」

待っているではないんじゃないかな？　　それは。もろ目に入るところじゃねえか。

まあ今はせつかくの宴会を楽しもうか。

夜も更けた頃、俺&霊夢と紫が向かい合っているという外の世界ではかなりシニールな光景になるであろう情景である。

「で、祠雷にお願いがあるってのはなんなの？」

「ええ、ちょっと外の世界に一緒に来てほしいのよ」

## 宴会デビューだぜ！（後書き）

次回、外の世界へ！ お楽しみに。

主人公の射撃の腕前は相当あります、俺モデルというのは祠雷が自分でカスタマイズしたチーと性能の銃です。ただ曲者ぞろいで素人どころか並大抵の人は使いこなせない代物です。

近いうちに出すつもりです。これで皆さん出すタイミングがだいたい分かると思いますけど……。

あとタグに主人公若干無双とありますがそれはまだまだ先のことでございます。

能力的にももう少し……いやかなり目覚めてからですよ。

## 外の世界で（前書き）

かなり現代ものになっています。

次からまともになるでしょう（天気予報風に）

## 外の世界で

「外の世界？」

「ええ、外の世界はあなたが一番詳しいでしょう、まだこっちに来たばかりだし」

「紫、なんか裏があるんでしょう」

「ないわよ、もちろんタダでは言わないから」

「タダでは言わないと言われても……危ないことはしたくないしまだわからない。」

「あなたの宝物をここに持ってきてあげてもいいのよ」

「宝物ってまさか……」

「ええ、あなたが自分好みに改造したものとか」

「乗った！」

「切り替えが早いわね……」

「あら霊夢、あなただってお饅頭1年分あげると言われたら食いくでしよう、同じよ」

「そんなもんね」



饅頭1年分で何でも引き受けるのか、本当に食べ物に関する執着心があるといえますか……

「そうだ、俺は何をすればいいんだ？」

「まあ順番に説明するわ、まず最近外の世界の妖怪たちが組織化してきているのよ」

「外の世界にも妖怪はいるのか」

「ええ、もちろんいるわ。もともと幻想卿ができる前は外の世界で暮らしていたんですから」

「確かにそうだな」

「まあそいつらが厄介なことをしてくれているわけよ」

「厄介事？」

「ええ、それも何の偶然かわからないけどあなたの住んでいた町でね」

霊夢も無関心ではいられなくなったようだ、しかし俺の町で起きている？ そんな話聞いたことがない。

「あなたも知っているでしょう、連続通り魔事件。少し調べさせてもらったけれど、あなたの唯一の親友が第一被害者みたいね」

「……俺に声をかけたのもそれが理由か」

その事件については俺が一番知っている、俺が幻想入りする前の約2か月前から始まり、被害者は10人を超えている。周りが山なので俺の町はある程度隔離されているから、直ぐに見つかってもおかしくない状況で犯人は見つからない。

「全員の手口が違うことは確認済みよ、彼らはそんな大所帯にも関わらず、私も見つけることが出来ないくらい隠蔽にかけてるわ。あなたは街の様子を一番知っている。隠れ家になりそうなところの目星は付くでしょう」

「要するにあんたは妖怪の存在がばれるのと、こっちの脅威になるのを恐れている。それでいいのかしら」

「まあ一番の目的はそれかしらね、被害者を出したくないのはここにいる小さな復讐者さんの思いでもあるでしょう」

(私としてもね……)

「まあ、一緒に来てくれるんでしょう」

「あそこまで挑発しておいて言うセリフか？」

「あら？ 何のことかしら？」

さっき霊夢に説明してもらった通りの人物だ。

「乗ったよ、復讐者にでもなんでもなってる。俺だって仇打ちに走るくらいの友情意識はあるさ」

「向こうのあなたとはだいぶ違う印象ね」

「勝手に勘違いしてたのは他の奴らさ」

（本当に彼にそっくり、あながち外れてもいないのかしら）

（私と初めて会った時と全然違う。これが本当の祠雷なのかしら？）

霊夢の素朴な疑問は当たらずとも遠からず――

「それじゃあしばらく借りるわね」

「ちゃんと返してね」

「心配しないで、あなたのものを取ったりしないわ」

「誰があんなものの所有物に置くか！」

「あんなもの扱いされた……」

「しかし、あなたは私を胡散臭がったりしないのね」

「信用しちゃだめだけど存分に頼って大丈夫って言われたからな」

「霊夢らしいわねえ、さりげなく傷つくこと言ってくれるじゃない」

「それよりも、どうやって外の世界に行くんだ？」

「気が早いわね。まあこうやって行くのよ」

こうやってってどうやってえ！

「初スキマの感想はどうかしら？ さて、私も行きましょう」

なんとも胡散臭い笑みの紫である。

あら、綺麗に頭打って気絶してるわね。

……ああ、頭が痛い。紫になんかされたのか？ そのあと何かに頭打って、どうなった？

「ここはベットなのか、となるとここは外の世界か」

ここはホテルみたいだ。

窓の外を見てみると見知った街並みが見えてくる、学校、公園、町で一番高いマンション。

ああ、何もかもが懐かしい気分だ。以外に大事に思ってたのかもしれない。

「そういえば紫は？」

「あら、お目覚めかしら」

「いきなり後ろから抱きつくのは女としてどうなんだ？」

「つれないわね」

「ここはどこのホテルだ？ 俺はこんな建物知らないぞ」

「新築の安物ホテルよ、あなたは高級ホテルよりもこっちのほうがいいでしょ」

「何で俺の趣味を知ってるんだか」

「秘密よ」

しかもこの匂いは風呂上がりか、まあここまで来たらどうせ俺に色仕掛けが利かないのも知っていると思うんだけど。

「それよりもどうやって妖怪どもを探すんだ？」

「襲う瞬間を狙うのがベストなんだけど、こっちから仕掛けるわ。昼はどうせ隠れていると思うから日が暮れてからが勝負。あなたが知っている限りの人気のないところで拠点として使えそうなところを片っ端から探るの」

「襲う瞬間だったら確実なんだな？」

「妖力は絶対に隠せないはず、けれども確証は絶対にない。それに全員で来るとも限らない」

（それに私の予想があっていれば相手は……そんなヘマをするとも考えられない。）

「そうか、一人二人犠牲になってもらう方向で検討しても無意味なんだな」

「あなた、本当に人かしら？」

「闇雲に探しに行って仕留められない、それプラス犠牲者が増えるよりはそっちのほうがいいさ」

「小を捨てて大を取る、あなたらしいと言えばそうかもしれないわね」

しかし、何でこいつは俺のことを知っている？

「あなたは顔に出やすいのを自覚したほうがいいわ」

「そうなのか」

（まるで彼と同じ、本当にそうなのかもね。疑問は確信へと確実に傾いているわ）

「とりあえず今は戦力を増やすわよ、あなたの家に案内して」

俺の家？　どうということだよ。

「何で俺の家なんだ？」

「あなたは能力よりも自分の得手で戦うほうが良くなって？」

……理解した。

「妖怪に銃は効果がないと思うが？」

「私が妖力を込めれば、どんなものでも魔法の道具に早変わりするわよ」

なるほど、それなら頼む価値もあるかもしれない。

しかし何で俺のためにそこまでするんだ？ 何か裏があるのでしょうか。えないけど今は素直に話に乗っておくほうがいいか。

それに向こうに戻っても使えるなら……

「弾はどうする気だ？」

「河童に頼めばマガジンごと作ってくれるわよ。設計図を見せたら楽勝の一言で返されたから」

「どこでそんなもの手に入れた？」

「気にしてはだめよ」

「そこまでできるんなら俺はいらない気がするけどな」

そんな奴だと思っておこう。

「さて、話がわかったならさっさとあなたの家に忍び込むわよ」

「ちょっと待て、今日は何曜日なんだ？」

「木曜日」

「だったら夜まで帰ってこない、正面突破で大丈夫だ」

「なら正面突破するわよ」

「でもこの時間に子供がうろつくと怪しまれる、それに俺を知ってる奴に出会うと厄介だ」

「なるほど、だったら直接送ってあげる。準備はいい？」

「侵入成功ね」

「スキマって便利だな」

しかし俺がいなくなってから何一つ変わらない部屋だ。本当に何もかも。

そしてこのクローゼットの中に作ってある隠し部屋（家族公認）もそのまんま。



親父がオーダーメイドしてまで作ってくれたロングコートもそのまんま。

これに関しては本当に感謝している。俺に銃という世界で生きさせてくれたことに関しては……

「さあ、あなたが使うものの全部持ち帰るわよ」

「その前に着替えたいから一回出て行ってくれ」

「あら、その格好も似合っているわよ」

「服にも細工してあるものがあるんだよ」

「なるほど」

ずいぶん素直に出て行っただけ……

「覗くなよ」

「覗かれないんならもう少し大人になってきなさい」

「もう大丈夫、送ってくれ」

「あら、随分と印象が変わるわね」

「防弾仕様なんだからしょうがないだろ」

今思い返すと何であるのかわからないけど。

「さあ、あれだけの量なら時間がかかるわ、早めに帰りましょう」

久しぶりのワルサーWA2000の感触が懐かしい。

しばらく手を当てるだけで済んだらしいんだけど本当に効くのかどうかはやってみないとわからない。

他にもいろいろこれからお世話になるだろう、実際にこういう場面で使うことになるとは思わなかったけど本望と言えば本望かもしれない。

暗視用に切り替えとくか……

「しかし、あなたもこんなもの好きになれるのね。やっぱり男の浪漫なのかしら」

「知らないね、ただ自分の片腕のように感じるだけだ」

「本当に好きな証拠よ。ほら、もうひとつ」

S&W M500（3点バースト）を渡された、1発1発の威力と反動がそのままで、3点バーストを実現した俺の努力の集大成である。

もちろんポンポン打てるような代物じゃないが。そんなことしたら  
手首おかしくして病院行きになる。

「これで終わりだな」

「ええ、夜まで待ちましょう」

## 外の世界で（後書き）

さあ、主人公の銃がどれだけおかしいものか、好きな人ならすぐにわかると思います。片方はまともですけどもう片方は明らかにおかしいですWW

えーと、読んでるうちに多分引っかかるところがあるでしょう。

今回はわざとです。狙ってますから悪い点には書かないでください  
（汗）

まあ紫が目的を素直に全部話すかってところです。

活動報告に質問板を用意したので何か気になるところがあれば其方のほうに。

銃の解説なんかも頼まれれば軽くやります。

次回からバトルに入ります。銃もたくさん出てきます。でも解説は用意するので大丈夫です。

## 殴りこみ（前書き）

遅くなりました、すいません。

今回、いつもよりは長いです。 1. 5倍くらいあります。

まあ今回は描写不足が致命的になるところも多いのできちんと確認してたりします。遅い理由には含まれています↑決して言い訳ではありません。

## 殴りこみ

風が冷たい、自分の相棒が少しだけ音を鳴らしている。今はこの音が何だか頼もしい。

夜、ホテルの屋上からスコープで奴らを探す、傍から見れば暗殺犯みたいなことをしてるのではないだろうか。こうしている間にも知らないところで事が起きているのかもしれないけれど。

ただ暗闇を闇雲に探しているわけではない、俺がこの町で人気のないところを片っ端に探す。地理に詳しくなければできない。子供のころの町中かくれんぼ（範囲は町全部、要するに狭い町だからの芸当である）でこの町は1日中歩いてるリーマン以上に詳しいつもりだ。

「見つかった？」

「また外れらしい」

この作業を延々と繰り返すとなると正直つらい、見つけてしまえばこちらのものらしいけど本当にそうなのだろうか。

ワルサーWA2000、どういうものかわからない人はこいつはライフル銃だと思ってくれればいい。後期型なのでフラッシュハイダーもちゃんとしている。これはとりあえず射手に優しいものだということだ、発砲音で耳を傷めることもない。

改造して、製品版と違うのはスコープに暗視用があることくらいだ。まさかこんな場面で役に立つとは思わなかった。というかだれが思うか。

「紫、わかってるな」

「ええ、妖力を見つけたら距離と方角を言えばいいんでしょう」

幸い高いマンションがないため死角があまりない。これは好都合である。

1日目で見つければ苦労はしないが、早く見つかるのも問題な気がするな。

あれから3時間、俺だけ緊迫、紫はなんら変わらない。  
今はその精神力がうらやましい。

「……来たわ、距離は2キロ半、北東。赤と茶色のマンションのあたり」

「了解！」

……見つけた、人型か、でも俺だって区別くらいはできる。ただ近くに人がいる。

狙いは人間の急所でもいいのかな？ 面倒だから頭を撃ち抜くことにする。

「当たれ！」

発砲音が夜空に響く、弾道は風もない空間をまっすぐに飛んでいく。音よりも早く飛んでいく、音が聞こえてからじゃ間に合わない。自分の腕を

……当たった！ のはいいけど完全に仕留めたわけじゃない。けどあたりを見回すあたり効果は十分にあるのだろう。

もう2発当てても結果は変わらない、まあ足取りフラフラでもう少しでしとめられる気もするけど。

「当たったのはいいけど仕留められてない、直接殴ろう」

襲われている人も心配だ。でももうそんな余裕もない雰囲気だな。案外小物か？

「まって、泳がせましょう」

……理解した。

「見失わずにすむか？」

「あら、追いかけるのはあなたよ」

……俺が目になるのか。とりあえず。

「わかった、ついてきて」

「期待してるわよ」



スキマの便利さを痛感する……待てよ？ 別に俺いらん気がするけど。

まあ理由があるんだろう。

向こうも移動し始めた、鬼ごっこの始まりだ。

空に向かって飛び出す、全速力でなきゃ追いつけないだろう。しかしスコープ覗きながらも追いかけていられるのは傷が深い証拠であらうか。

一番心配なのは素直に帰ってくれるかどうかだ。

（奴にとっては正体不明の相手なんだ、逃げることに専念すると思うけど……）

結果としてその心配は杞憂に終わる。

「計画通りね」

俺でもわかる、妖力こそあまり感じられないものの大量の数がある。無駄に緊張してくる。

場所は山の中の豪邸、もはや都市伝説化したくらいのものである。何故かしら嚴重に封鎖されていると一部の心霊マニアには知れ渡っ

ているらしいけど詳しいことは知らない。

ただ、雰囲気はやばい。なぜか変換できないとか言ってる場合じゃない。

これは心霊スポット扱いしても文句は言われないうだろう。現に妖怪がいるんだし。

「この中にいるんだな」

「ええ、さあ。夜が明けないうちに終わらせるわよ。朝になったら面倒なことになるし」

（まさかこんなに早く見つかるとは思わなかったけど、しかしここまで上手くいくのみなにか怖いわね。まるで必然だというように）

「能力も惜しみなく使いなさい。じゃなきゃ死ぬわよ」

「この年で死ぬのは御免だ」

さあ、突っ込むぞ。

中は殺風景なつくりだ。

早速気付かれたらしい、戦闘開始だ。もう少し落ちつけよお前ら。

弾幕ごっこなんかじゃない本気の殺し合い。背筋を何かが走るが気にしない。焦ったやつから死ぬのは最早お約束だろう。

「別れましょう、私は右」

「俺がどうなってもいいのかよ……まあいいけどさ」

こういうときには弱いほうにボスが来るんだよ、まあ大抵助けは間に合うフラグも立つものだけどここは現実だしなあ。

「生きてまた会いましょう」

2人はそれぞれ違う方向に飛び出す。せいぜいあがかか。

俺のほうについてきたのは4人、面倒なので何人と数えることにする。人型だし。

俺のほうが弱いと踏んだ奴らか。挟まれると面倒なので先に倒すことにする。

もちろんここでやられるパターンもあるだろう。

「ハアアアアッ！」

体中から電気を放出する、決して無差別ではない。きちんと狙っている。そうしないと大惨事だしね。多分そのうちそんなこと言ったられなくなると思うけど。

1人撃ち落としたか。でも言い換えれば1人しかでもある。

3対1の分の悪い勝負ではあるけれど従うしかない。

2人が飛びかかってくる。避ける、振り向く、電撃、避けられる。残りの1人が不審な動きを見せるけどかまっている余裕なんてない。まずはこの二人をなんとかしないと――

何度か打ち合いが続く、相手方も本気で潰しにかかってくるようだ。

1人の足を掴んでもう1人に殴りかかる。そこで遠くの1人が動き出す。

俺の行動を制限するように飛んでくる、おそらく妖力を使って作られているであろう針。

しかし同士打ちの気配はない、まるでお互いを信用しているように……そうか、こいつらは連携が取れているんだ。お互いに信用しあって相手を確実に追い詰める。

2人の相手で手一杯なため、背後に迫る気配を頼りに避けるしかない、こんな綱渡はやっているこっちが一番ひやひやする。正直今現在も死ぬかもしれない。

知らないうちに負の連鎖に引き込まれるわけか。紫は大丈夫だろうが自分が危ない。

不自然に空いている逃げ場は罠ではなく1人欠けている結果であろう。つまり潰せば弱くなる。けれどもそろそろ他の連中が来てもおかしくはない。

確実に各個撃破するしかないのか……

まず接近戦の片方を狙って連撃の手を止めさせよう。

まずはこの針をなんとかしなければならぬ、一瞬だけでも攻撃を止められたらペースはこっちのものになる。おそらくほんの少しの間だろうが――

「ッ！」

考え事をさせてくれる程甘くはない。手っ取り早くけりをつけよう。思いついたのはスペルカード。

スペルカードを取り出し高々と宣言する。

『光撃「スタンフラッシュ」』

閃光――

それとともに襲いかかる音と風圧。

弾幕ごっこ以外の時にスペルカードを使うのは初めてだが、殺傷能力もある凶悪なものに変わるらしい。ためらっていたら死ぬのは自分であるから何とも言えない気持ちにはなるが。

しかしひるませるのは十分な効果があった。3人そろって攻撃の手を休ませる。

まずは針使いに高圧電流をたたきこむ。次は近くでもろに閃光攻撃を浴びた1人。

最後に残りだが……残念、ギリギリで立ち直って仕留めそこなった。けれどもあわてて避けたから隙だらけで笑えてしまう。容赦なく飛び蹴りを入れて床に沈め。止めをさす。あっという間に3人沈めた。

「ふう、最初からこうしておけばよかった」

今になって少し後悔、まあいいけど。

「しかしこれだけの騒ぎがあつて全然他の連中がこないな」

それは紫のほうにほとんどの勢力が引つ張られているからであるが  
祠雷には知る由もない。

「これは拍子抜けするかもしれない……！」

噂をすれば何とやらというが本当に新手が来るとは。

通路に身を隠す、来る方向は大体分かる。懷からM500を取り出す。

不意打ちでこれを喰らえば妖怪といえどただでは済まないはずだ。  
あの後紫に一番上手くいったとまで言われたんだから。

このS&WM500は注意書きにでも「人間の限界に迫ったスペック。安易にこの銃を撃った場合、射手の健康は保障できない」と書かれた。いわばモンスター（俺解釈）である。

撃つと手の中で何かが爆発した感覚がするというがまさしくその通りであんまり調子に乗っていると手がしびれてとんでもない目にあう。しばらく字が書けなくなる人もいるらしい。しかしその分威力は世界最強と言っているいいだろう。

ただ俺はこれを3点バーストにするといふかなり馬鹿なこと……つまり3連射であり言い換えれば無謀なことをしている。装弾数はもとが5発なのを12発まで引き延ばしている。その分巨大化は免れないがそこは気合いである。

良くわからない人はロケットランチャー（小型版）的な感じで見れば大体は会っている。

更に要約するとすげえ威力、でいいだろう。

まあ隠れて射程距離に入ってくるのを待つ。

足音が聞こえるあたりよほど警戒はしていないのだろうか？  
しかし複数人であることはわかる。まさか油断している？  
だとしたら器が小さいな。

しかし感じる気配からはさっきよりは強いのが俺みたいな素人でもわかる。やはり奥に行くほど敵が強い法則はここにも通じるらしい。

軽い騒ぎが起きている、どうやらさっきの死体を見つけたようだ。  
少しは動揺するかと思ったが逆効果らしい。しかし声の聞こえ方からしてもう近いようだ。

3 2 1で飛び出そう。3……2……1……0！

GO！

飛び出して目に入ったやつを片っ端から撃ちまくる。

マガジンを捨て、新しくする。

畜生、全部打ち終わったのはいいが手がジンジンする。これじゃあしばらく格闘も銃も使えない。今更だけどやめておけばよかったかもしれない。

しかも更に後悔することになった、そう。人数がなんと……

「9人もいるのかよ！」

よくこんだけいながら紫に見つからないな。なにかトリックでもあるのだろうか？

しかし出てしまった以上戦わないわけにもいくまい。あくまで被弾

した5人を覗く9人だ。

もしかすると5人減らせたのはかなり上々なのではないか？

まあとりあえず相手が来る前にスペルカードを使っておこう。

うう、手が震えて掴みにくい……

『雷光「稲妻柱の大封絶」』

1回だけ跳ね返る雷が無数に落ちる。これは間違いなく騒ぎになるのではないか？ 気にもしていられない。

しかしこれで一網打尽にできるといいんだが……そんなに簡単には死んでくれない。

「畜生！」

「お前がもう一人とやらか！」

その中のリーダー的なやつはあいつか。だけど大本はほかにいる雰囲気だな。

こいつより大きい気配をかすかに感じる……

スペルブレイクだ、残っているのは6人。一方的な攻撃もこれが限界である。

もちろん反撃の手は来るわけで……

「ハァ!!」

「逃がすか！」



さすがに6人から逃げ切れるわけがない。リーダー格の攻撃を受けそうになる。

そこで飛びのいて半分やけくそで雷撃……をするとまさかの命中。まさかこいつ残りの6人で一番弱い？

まあ運が良かったってことでいいだろう。残り5人は完全にやる気である。

しかし幸運は続くもので……

バン！ と壁が異様な音を立てて吹っ飛んだ。もちろん5人を巻き込んで。

そこには何と……

「紫!？」

「あら、こんなところにいたの？ 首尾は順調？」

「まあ、一応生きてるし」

あんたがいなければ死んでいたかもしれないとはあえて言わないでおく。

「まあとりあえずお互い生きているみたいだし、いいとしましょう。私はあっちに行くわ」

「じゃあ俺はこっちで」

紫は通路を、俺は広間にある大きな扉を指さした。

「じゃあまた会いましょう」

すぐに紫は行ってしまった、俺も大きな扉を開ける。すると……

ここは中庭か？

とりあえず奥に進んでみる。天井がなく、星空が見えるあたりはロマンチックだけど今はそんな場合じゃない。それに寒いだけだ。

東屋を抜けると、というか何であるんだろうとか思いながらも。とりあえず抜けるとそいつはいた。

青年の様な顔つきをしていて、服は意外に現代のものを着ている。ジーンパンにロングコートの男だ。そいつは俺を見てこういった。

「ほう、スキマ妖怪ではなかったか。まあ当てが外れたな」

こいつは紫のことを知っている？ どういうことだ？

「しかしお前を見ると懐かしい顔を思い出すな、どこか似ている」

「何を言っているのかは知らんがお前はここの親玉でいいんだな？」

「ああ、本当に似ている。まあ質問には答えてやろう、その通りだ。俺はここの妖怪どもをまとめている、最初に人間を殺し、ここで組

織として成り立たせたのは俺だ」

最初に殺し……まさか。

「てめえが陽泉を殺したってことか」

「誰だそりゃ？　俺が殺したのは最初のカギだけだ」

よりによってか……不幸なめぐり合わせもいいとこだ。偶然か必然なのか、今この時わかるというもの。

「あんたをぶっ飛ばす理由が増えたな」

「そうか、事情は察した。では全力で相手してやるとするか」

なかなか大物らしい、けれども俺には関係ない。

悲しくはない、けれども正義感よりも違う、大切な何かが俺を後ろから押している。

たった一人の親友の仇打ちという大義を掲げて全身全力で戦い抜いてやるんだから――

## 殴りこみ（後書き）

今回もバトル回、次回もバトル回です。

銃の説明は誰にしてるの？　みたいな突っ込みは無しの方でお願いいたします。

簡単に要約しましたがわかりずらかったら本当に聞いてくださいね。活動報告に返信0人というのも悲しいですし。いや、本当に遠慮はいりません。むしろされると困っちゃいます。

友人にはwiki見た方が早いといわれてしまいました。僕が僕の説明は言葉が簡単なので初心者もわかりやすいですよ（必至）

陽泉については過去話で出そうと思っています。まだ当分先の話ですが幻想入り前の主人公の様子を書く時にでも一緒に出すつもりです。

まあ活動報告で過去話についてはまとめておきますので。

## 第二の決着（前書き）

すいません、前回のやつ見直しの前のやつです。本当に誤字が多いと思います。

よりによって消した後気付いてしまいました、今度書き直して再投稿します。

では今回もバトル回です。

## 第二の決着

戦いの火ぶたは切って落とされた、先手はこちらに譲ってくれたらしい。どこまでが意図なのかわからないやつだ。

「喰らえ！」

あらゆる物を伝う電撃が四方八方から青年を襲う。それでも軽々しく避けるあたり実力は申し分ない。自分より段違いに強いことがわかる。

妙に力が入る、体が軽い。まるでこの舞台を後押しするかのような追い風のような、もとい高揚感、何かの恩恵でもあるのだろうか。しかし自分でも信じられないくらいの力が出せる。

「おっと名乗ってなかったな、俺はレイⅡシャドウ。名前通りの奴だと思え」

（しかし電撃とは、これもスキマ妖怪の差し金か？）

名乗られてこちらにも名乗らないのはさすがにダメな気がするな。しかし自分から名をばらすのはどういう意図がある？

「俺は神依崎祠雷、ただのガキだ」

レイは一瞬驚愕の顔をした、何が心に当たるんだろうか。

「では名乗りも済んだところでお互い全力で当たろうじゃないか、俺もこうやって誰かと戦うのは久しぶりなんだ」

（祠雷の名だと……それが本当ならこれは単なる復讐劇ではなく、あの女の幻想ができた頃からの因縁ということか？　しかしもしそうであるならばなぜ電撃なんだ？　俺の考えが正しければ紫電を使ってこなければおかしい。いや、考えても無駄なことか）

向こうも本格的に仕掛けてくる気になったようだ、手に何か持っている。

まるで車輪のようなもの。刃のついた15cmほどの輪を両手に1つずつ持っている。

それを投擲してきた。しかしすぐにおかしい事に気が付く。

そう、車輪の進路がおかしいのだ。

レイの能力か何かは知らないが進んでいる道が安定していない。非常に避けずらいものになっており。連続で投げられると避けるだけで手一杯になってしまう。

それだけじゃない。本体の方もどこにいるのかわからない、本当に今見えている場所にいるのかどうかかわからないという錯覚を見せられてしまう。

どうしてそれがわかるのかもわからない。まるですべてが曖昧で境界線などないように感じてしまう。それがレイの能力であるのか。

こちらの攻撃もろくに当てられないので非常にやりづらい、紫と一緒にくればよかったと今になって後悔している。

何もかもが謎の中に恐怖まで覚えてしまう、しかしそれに負ければ終わりなのもわかってしまう。

けれども戦うしかない、勝つことしか残る道はない。全力を出して、後のことを考えていたら持たないであろう。

そして自分の持てるすべての力を引き出した、なぜこんなことが突然できるのかもわからないけれど――

勝負の展開は意外に平行線をたどっていた、そうどちらの攻撃も当たらないのだ。

このままでは体力のない自分が負ける。それは解りきっていた。

そこで1枚のスペルカードを取り出し、決着へと一気に畳み掛けることにした。

『雷符「雷様の大名行列」』



雷雲が召集される、これはもう隠蔽の仕様がなくらい。

とにかくどこににいるのかわからないならどこにいても避けられないように攻撃すればいい。単純な質量作戦である。

ただ効果はあるはずだ、まさか実体化してないわけではあるまい。そんな芸当できるのならわざわざ姿を見せ続けるはずがないのだから。

なんだか自分でもびっくりなくらい次々と戦略が思い浮かぶ。けれども成功させるのは俺だが。

雷撃の行進が始まった、この建物を壊すつもりで放っているので威力は申し分ないはずだ。

すばしっこく動いているけれどすぐに追い詰められる、スペカと俺の雷撃を同時に相手にするのはきついはず、いつか必ず追い詰められるはず……だが。

「なかなかいい攻撃じゃないか、これだけでできれば俺も全力の出しがいがあるというもの」

簡単に振り切ってきたやがった……これはもう笑うしかないだろ。しかしこいつの力は何なんだ？ さっきから全く読めない。

もしや能力ではないのか……それとも応用が効きすぎて俺がついて行けていないのか。どちらかしかないだろうが――

「しかし今思うとあの女も来なくて良かった、ただでさえあいつと

は相性が悪いのに2対1なら本当にわからないからな」

紫と相性が悪い……紫は境界を使う。相性が悪いのは境界線を定められることⅡ曖昧な何かを使うこと。さっきまでのあいつははつきりしないことばかり……もうわかったぞ。

「あんたの能力見切ったぞ、おそらく何かを曖昧にする能力だろう」

「ほう、俺の言葉から答えにたどり着くか。案外一番頭の切れる奴かもしれないな。まあいい、その通りだ、誉めてやろう。その功績をたたえて人生で二番目に本気で闘ってやろう」

それまた微妙な待遇だな、しかし奴の全力はどこまで強いのか……！ 消えただと、気配も周囲に散りばめられている。これじゃあとこから来てもおかしくはない。

どこからくるんだあつ！

意表について正面からきやがった、これは冷静に対処すればなんとなる。

しかしこのままではじり貧だ、何か手を打たないといけない。

こちらから持続的に仕掛けるしかないというのか……

今見えている奴に雷撃を放つ、避けられる、撃つ、避けられる、撃つ、避けられる、こっちに来る！

「畜生！」

身を翻して避ける、続けて投げられた車輪を側転で避ける。  
しかしそれだけではない、攻撃方法はそれだけではない。  
鋭い針が飛んでくる、霊夢のより早いんじゃないか？

なんとか避ける、しかしその時には後ろに回られる。短い小太刀の  
様なもので切りかかってきた。

何とか避けるも脇腹に蹴りを入れられる。喧嘩っ早い町の不良ども  
よりかは威力があるけどもそれほどでもない。おそらく力はそこま  
でないと踏んだ。  
正面からの力比べではこちらに軍配が上がるであろう。

しかし冷静に分析できたとしても、仮に弱点がわかったとしても。  
こちらにはそこまで持っていく手段がない。案の定奴はヒット&a  
mp;アウェイの戦法を取ってくるので奴の居場所を掴むことすら  
難しい。そんな中でどうやって……ひとつだけ案が思いついた。

こちらがわざと攻撃される、その隙をつけばいいんだ。  
かなり綱渡な戦法だがこのままやられるよりは十分にましであろう。  
紫が来てくれればそれこそ形勢逆転だが、それに期待するほど愚か  
ではないさ。

さあ考えている間に来たぞ、後ろから小太刀を振るわれる、しかし  
同じ手が通用するほど俺も甘くはない。

振り返り、今にも俺の頭に突き刺さりそうになっている物を、右手  
で掴む。実は今の自分の反射神経は自分でも信じられない。だって

真剣白刃取りよりも難いんだぜ。

しかしこれで両手の動きを本当にほんの一瞬だが封じることができた。

この隙を見逃すほど俺も弱くはない。

『雷符「シャイニングスパーク」』

あらゆる方向に延びる電撃はまるで人工的な雷が自分から発せられている光景が目に見えかぶほどだった。

そしてその中心にいて無事ですむはずがない、当然全身に雷を浴びることになる。そして現にその通りになっている。

「グ……ツアツ！ やるじゃねえか、だけどこのくらいで倒れるほどやわじゃないんだ」

そう言ってまた消えた、右手が使えない今、下手に不意打ちをされるわけにもいかない。

壁に背を預ける、これで壁をすり抜けないと背後は取れない。この壁を破る力はおそらく残っていないだろう……

その時、上から小さく何かがぶつかる音が聞こえる。

「上か!？」

上を見上げるもそこには誰もいない、その代わりに投げつけられた針が落ちてくるところだった。まさか……

しかし気付いた時にはもう遅い、飛んできた針に右肘が壁に縫いつけられる、もろ貫通しているが痛みを通り越して何も感じない。もはやそれが異常なのか。

そして勝ち誇った顔でレイⅡシャドウは針を構えていた。

「随分と粘るじゃねえか、だがこれで終わり。人の身でよくここまで来たな、誉めてやろうじゃないか、けどもう俺の勝利は揺るがない。ここでお別れだ」

そして針を投げつけてくる。だめだ、もうここで終わりなのか？ここで死ぬのか？嫌だ、俺にはまだすべきことがある。絶対にここでなんか終われない。

ああ、すべてがスローに見えてくる。さあ、最後の力を振り絞れ。この枷を吹っ飛ばして一矢報いるんだ。さあ！

「死んでたまるかあああああつ！」

これが俺の全力だ、見ろ、俺を縫い付ける針が吹っ飛んだ。同様に投げつけられた針も吹っ飛ばす。

はは、飛んだ驚いた顔をしてるぜ。見せてやる、人間の底力がどんだけすごいものなのかをなあ！

そして俺の全身全霊をかけた雷撃を繰り出す。しかし自分でも驚愕する。そう、なぜなら空間を走るのはただの青白い電光ではなく……

迸るは紫電、すべてを貫くようなきれいなものだった。思わず自分でも見とれてしまうような。なぜそうなったのかもわからない。けれども確かに自分が発したのだけはわかった。

レイ||シャドウは驚愕に満ち溢れていた。頭の中は疑問符で満たされた。なぜあいつが？ 浮かんではそれだけだった。

「馬鹿な、なぜあいつが紫電を使う。俺は確かに殺したんだ。こんな輪廻が俺に回ってくるというのか。ははっ、なんだか笑えてくるな。事実であればこれはあらかじめ決められていたことだ。必然だ。俺は殺した本人に仇討されたんだ。そうか、すべてつながった。これが運命というやつなのか……俺は、とんでもない相手を背負っていたわけだ——」

すべてを見透かしたような表情で、レイ||シャドウはとても静かに紫電の光に吞まれていった——

気がついた時には自分の意識が飛んでいく寸前だった……

「ああ、何もかもがうまくいきすぎて怖いくらいね。何か裏があるのではないかと思ってしまっわ、あとで何かが返ってきそうで怖いわね」

そして紫は何か懐かしいものを見る眼で祠雷に駆け寄って行った。

「律儀に約束を守ってくれたのね、けれどもそのおかげであなたにまた会うことができた。本当にうれしいわ」

さて、どちらの彼もお疲れでしょうし。休ませてあげなくてはならないかしらね。

彼は彼に確実に近付いているわけだし――

## 第二の決着（後書き）

新しいオリキャラについても過去話を考えております。2つの種類の過去話含め、それで全てがつながるようにしてありますので。

ちなみに祠雷の紫電はバージョンアップみたいなもので普通の電気は出せなくなりました。

能力も「紫電を操る程度の能力」に戻ります。皆さん、あくまで戻るですよ。

次回、ゆかりのターンです。



## 悠久ぶりの再会（前書き）

一人語り会です。見てもつまんないかもしれません。

けど大事なこともちゃんと言っているんで我慢して見てほしいです。そうしないと後でこいつ何言ってるん状態になっちゃいますから。

一応紫のターンですよ。信じてもらえないかもしれないですけど…  
…

## 悠久ぶりの再会

「今すぐにも目を覚ましてくれたらどんなにうれしいことかわからないわ。でもね、今こうして入れるだけでも私は幸せなの」

ホテルの一室にて、紫は決してひとりごとではない会話をしている。紫はベットに寝ている祠雷の頬をなでた、そして窓の方に歩き。何か遠いものを見るかのような顔で景色を眺める。

そしてどんな考えを持っているのかわからない顔で笑みを浮かべた。

「おかえりなさい、レディーをこんなに待たせるのは失礼じゃない」

振り返ればベットに腰かけているもう一人の彼に、まるでいたずらがばれた子供のような顔で笑いかけた。

ベットに寝ている祠雷と腰かけている祠雷。そこには2人の祠雷がいた。

「ああ、悪かったね。けれども僕はこうして約束通りに帰ってきたんだ、結構大変だったんだからね。けど、またこうして話せるかと思うとそんなもの関係ない。十分に満足な結果さ。姫――」

祠雷であって祠雷ではない、けれども確かに祠雷である彼は確かに紫を姫と呼んだ。

紫はこう返した。

「あなた、一度死んでもそうやって呼ぶ気力があるのね」

「ああ、紫だって悪い気はしないだろう。あんなにうれしそうに僕の死に顔を見届けてくれたんだからさ」

二人は少しの間見つめあった後、紫が照れたように目をそらし。祠雷はベットに横たわった。

お互いの時間が平行線で流れていく。あたりまえだけれども二度とないんじゃないか。お互いにそう覚悟していたはずのことが覆された。約束は果たされた。

遙か昔の別れは、再開という形で巡り合えたのだ。

「彼には、悪いことをしたかな」

本当に申し訳なさそうな顔で彼は言う。

「僕という存在のせいで、本当の神依崎祠雷という人間の運命を塗り替えてしまった。なぜそんなことができたのかは僕にもわからない。そして僕は彼とともに歩むことになった、僕は彼のすべてである、彼は僕でもある。ただし、お互いに違う。僕は彼のすべてを知っているけれど彼は僕のことすら気づいていない。それだけななさ」

物悲しそうな顔で、けれど淡々と話を続ける。一人語りが物語を飾る。

「僕は彼に才能と人超を与え、彼は努力をし、結果を身につけた。彼は僕も信じられないくらいに強さを、己の父親を超えるという気持ちだけで手に入れた。幻想郷に来る前から明らかに人間離れした強さを手に入れていた。そして僕の最大の力である紫電をも使いこなした。レイⅡシャドウとの戦いでは少しばかり手助けさせてもらったけどね」

紫も興味深そうに彼の話に耳を傾ける、話は続く、まるで自分を呪うかのように続けられる。本人はなにも感じないであくまで事実であることを話す。自分でも気づいていない気持ちを抱きながら。

「幻想郷という存在は彼を僕に大きく近づけた、時期に彼は僕に染まるだろう。僕の力を使いこなすであろう。精神的にも肉体的にも僕になってしまう。身長も体格も性格も。これから僕という存在が彼の中から消えたら急速的にね。多分このしゃべり方もうつるんじゃないかな、一人称も僕に変わるだろう。それは運命を塗り替えてしまったからさ。そしてレイⅡシャドウ、僕を殺した張本人との戦いが。彼をも僕をも目覚めさせた。ただし、彼はおそらく僕に染まりて僕を超える。なぜなら彼には僕の与えた素質がある。彼は紫電だけではなく、光という僕には使えない力を持つ。紫色の光を一度見たかったけれどしばらくお預けになるのかな、自分で言うのもないけどきれいな光なんだろう」

語り終えた祠雷は満足しきった顔になった。まるで今にもどこかに消えてしまいそうな寂しくも清々しい顔である。

「けれどもあなたに似ていないところがあるわ」

紫はそう言って手で拳銃の形を作った。

「ああ、僕は二刀流だからね。けれども彼はサッカーをやっているし、かなり同じ年の中でも飛びぬけて上手みたいだ。どうせ僕の武器は大事に取ってあるんだろう、使わせてみればすぐになじむと思うよ、氣にいるかは別だけど機会があれば試してみるといい」

彼は立ち上がり紫をそっと抱き締めた後、静かに窓の方に歩いて行った。

「そうそう、藍にも伝えておいてくれないかい。君との約束を果たせなかったことを謝っていたと。僕は彼の体から抜けて幻想郷を見守ろうと思う、彼女には申し訳ないけどね。まあ幻想郷の危機の時には僕も現われて力になろう。君が僕を幻想郷に縛り付けたんだからな、幻想郷のピンチには僕も出るしかないんでね。それが使命なんだから……まあとりあえず先に僕をあっちに送ってくれ。今彼と会うわけにはいかない」

「ええ、じゃあまた会いましょう。しばしの別れを営みましょう」

スキマが開く、彼は入る直前に振り返ってこう言う。

「ああ、最後に教えてあげよう。彼がなぜすぐに飛べなかったか教えてあげよう。それは僕が彼の霊力の器に住んでいたからさ。僕と同化していたから器の大きさは僕と同じだけあるし彼の分を足すとそれ以上だ。だから入れたんだけどね。つまり僕が抜けたら僕のように膨大な器が残る。特別に出ていく時に満たしてあげるからとんでもない量だ。霊夢も驚くに決まっている。それだけ伝えておこう。僕はもう彼に手助けはできないけれど、もう必要ないだろう。それじゃあまたの別れを」

そう言って祠雷はスキマの中に消えていく、残されたのは紫と祠雷。紫はスキマから2本の剣を取り出し。両手でかざした。まるで面影と照らし合わせるように。

そこで紫は床に手紙が落ちていることに気がついた。拾って内容を確認する。

『頼みなんだが、彼の勉強机の上から3番目の引き出しにひいてある紙をめくったところに隠してある物を、せめてもの情けに処分しておいてやってくれ。灰になるまで燃やしてかまわない。中身は黒歴史と思春期の男の秘密が入っているから、中身は見ないでくれると助かるかもな』

……あなたの頼みを私が断るわけじゃないじゃない。

紫は笑ってスキマに入って行った。

あれから一向に祠雷は目覚めなかったので幻想郷に連れて帰られた。霊夢のところに運ばれて第一に放たれた言葉は「何！？ こいつ本物の祠雷なの？ とんでもない霊力なんだけど」だった、彼の予想

は当たっていたらしい。

それから1か月の間、目覚めることはなかった。彼が目を覚めたのは秋の時雨時だった。

雑談中の4人の傍らで目覚めたのだ。

「あら、眠り姫が起きたわね」

「姫ではないんじゃないかしら」

この声は……霊夢の声が聞こえる、もう一人はアリスか。ここは博麗神社でいいのか？　しかし眠り姫って100年の眠りからとかじゃないんだから。その前に男だな。うん、それに最初に突っ込むべきだった。

目を開けた俺は驚きに目を見張った、なぜなのかって？　俺は秋の初めでまだ紅葉が始まったぐらいで外の世界に行ったんだ。なのに落ち葉だらけで部屋の中にも落ちている始末なんだから。

「霊夢か、それに魔理沙と咲夜とアリスがいる」

「あんた1か月寝ておいて最初の一言がそれなわけ？　まあそれらしいんだけど」

「私はお嬢様に伝えてきますので失礼します」

咲夜が消えた。相変わらずの奴だ……おい待て、今1か月言うたよな1か月。マジでそんなに寝てたのか？  
どおりで季節の変わり目なわけだ。

「じゃあ邪魔者は退散するぜ、それじゃあな」

「私もお邪魔するわね、上海、蓬萊、行くわよ」

邪魔者って、まるで俺らがそんな関係……いや、何か意識すると照れる。

俺はその考えを無理やりどこかに追いだした。

しかし起き上がると一つ思ったことがある、それは……

「霊夢、背とか縮んだ？」

「馬鹿なこと言ってんじゃないわよ、そんなこと……」

お互いに立ってみると明らかに俺の背が伸びていることがわかった。

「あんた……いつそんなに伸びたの!？」

俺だってわからない、けれど明らかに今までより頭3分の1くらい目線が違う、霊夢より小さかったはずなのに背丈を抜かしているところに確実性があるんだろう。

「霊力もとんでもない量になってるし、背も伸びてるし、おまけに力が進化したですって？ 向こうでどんな体験してきたのよ」

ちょっと待て、明らかに俺の知らないことが混じってるぞ、霊力っ



て何だ霊力って。俺は少ない宣言されてんだぞ、他でもない霊夢に。しかも力の進化とか何ぞ？　もしかしてあの紫電のことか？

試しに携帯の充電をしようとするのとコートが脱がされていて服に仕込んである武器の類も全部ないことに気が付く。

「霊夢、俺のコートと武器は何処行った？」

「ああ、今持ってくるわね」

……しばらくするとかごに入れられたものを持ってきた。やっぱりこれがないとな。

俺に大量のEマークがついたあとに改めて能力を試す。

するとどうだろう、出るのは紫電ばかりで前の青白い電氣が出せなくなってしまった。

まあ携帯の充電ができるのは変わらないし。何かが変化しているのは確かだろうが。レイⅡシャドウとの戦いで分かったことは威力と綺麗なことくらいだからな。

「あんたの電氣の色が変わってる」

「ああ、なんか突然出たと思ったら元に戻らなくなった。それよりも霊力って何だ、俺は少ないはずだろ？」

霊夢も少し困った顔をしていた。

「帰ってきたあんたの霊力の量が半端ないのよ、向こうで何かあつ

たの？」

そんなことは俺も知らない。何かあるとしたらレイⅡシャドウとの戦いだろう、自分でも何が起きているのかわからないけれど。

そんなことより俺はレイⅡシャドウの言っている言葉の意味が気になる。

まるで紫のことを知っている口ぶりや俺についても知っているそぶりを見せている。

妖怪の一覧表でもあったら便利なんだけどな、戸籍みたいに。

「なあ、妖怪の戸籍的なものってないのか？」

「妖怪の戸籍？ 幻想郷縁起でも見たらたいいのやつはわかると思うけど、それがどうしたの？」

「いや、ちょっとな」

まさか正直なことを霊夢に言うわけにもいくまい。

「まあいいわ、聞かないであげる。明日にでも案内してあげるから今日はゆっくり休みなさい」

「悪いな、そうさせてもらうよ」

あいつについても何かわかるんだろうか。

とにかく明日にならないければ何もわからない。今は休んでおくか。とにかくそのなんちゃらとかを見たらわかることを信じるしかない

んだし。

「紫様、どうでしたか？」

紫はとてつもない笑顔になって言う。

「ええ、彼がそうだった。けれどもあなたにまた会うのは当分先になるわね」

「そうですか」

「まあ冬眠の前に全て話しておきたいわ、橙はどこかしら」

「今はチルノと遊びに行っています」

紫は居間に入ると黙ってついてこいの合図を出した。  
テーブルをはさんで向き合うと紫が口を動かし始めた。

「さてと、藍には彼の伝言からかしらね」

そのあとは夜まで話し続けたという……

## 悠久ぶりの再会（後書き）

どうも、この面倒な会話回を最後まで見てくださってありがとうございます。

お願いだからつまらないって切らないでくださいね（作者の結構必死のお願いです）

次回から普通になるので、いや本当ですって。

もう一人の祠雷もレイ||シャドウとともに過去話で出すのでご安心を？

ではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6838x/>

---

俺と雷と幻想郷!?

2011年11月30日18時52分発行